388.23
Ta29

0054804000

0054804-000

388．23－Ｔａ２９ウ

東甫塞物語

高垣謹之助・著

高垣謹之助

昭和１７

AID

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年５月１５日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

431

388.23
TA29

東甫（カンポ）塞（チャ）物語

840
294

はしがき

昭和十六年十二月八日對米英宣戰布告の大詔渙發せられ茲に畫期的大東亞戰爭勃發するに際會して聊か乍ら何か記念せんとて豫て志して居た東甫塞物語を急ぎ完成に務めた。此七月平和裡に皇軍の南佛印に進駐するや俄然東亞共榮圏の一員として佛領印度支那全體は我朝野の關心を高めた。就中泰國に隣接し世界的遺蹟として知らるゝアンコール廢都(ワット)のある東甫塞王國は嘗て泰國領土たりし所とて政治、文化、思想等凡ゆる點に於て著しく泰國に酷似し佛印中特に異色ある所で盛んに興味を以て新聞雜誌に報導せられてゐる、誠に夢の國お伽噺の國である。乍然曾て元和慶長の時代には國都プノムペンの北方ウドーンの河港には數百の日本人家屋軒を連らね隱然たる日本殖民地の感ありし處で當時如何に我國と密接なる關係あり頻繁なる交易ありしかを想像する事が出來る。

筆者は二十年前西貢滯在中休日を利用しプノムペンを訪づれた。既にウドーンの町は荒廢して何物も殘つてゐないと聞いた。今皇軍は堂々と進駐してゐるのだ誠に感無量の次第である。當時滯在中色々と蒐集した參考書も實は今迄筐底深く忘れて居たが皇軍進駐と共に思ひ出して今更乍ら取り出し當

時の見聞を織り入れて茲に纒めたのであります。物語中アンコールの十二人の娘、ロチサン、ロム・サ・サツクの三篇は東甫塞のみならず泰國にても人口に膾炙せる傳記物語で、特に長篇ボルボンとソウリボンの兄弟物語の悲劇的な且つ冒險的な變幻極まりない人生行路は今尚東甫塞人士に廣く親まれてゐる物語で我國の昔噺にも一脈通ずる所あり、蛇退治や狒々退治のやうな場面が出て來る、丁度寶塚歌劇の種本には誠に恰好のものと思はれる。要するに他愛ない物語であるが未だ世に餘り紹介されて居ないものであり、且つ皇軍進駐せる同地方の味なり匂ひなり多少共酌んで頂く事が出來れば私の幸と致す所であります。

尙本編收錄するに當つては同僚岩田喜典君の多大なる御努力に負ふたものであり又表裝は義弟關口俊吾君を煩ばし其好意に甘えたもので何れも茲に厚く感謝の辭を捧ぐる次第である。

昭和十七年一月三日　マニラ陷落のニュースを聽きつゝ

高垣謹之助

目次

一、アンコールの十二人の娘……一
二、ロチサン……八
三、ネアン・ロム・サ・サツク……一五
四、ネアン・カケイ……二三
五、メアユン……二七
六、サンセルキー……三八
七、ボルボンとソウリボン……六七

以上

東甫塞物語

アンコールの十二人の娘

十二人の双児娘を抱えた其日の糧にも苦しむ木樵はヒソヒソと妻と語り合つた、

「最早此以上は堪えられない、可哀想だが子供を皆森の中へ捨てれば森の神様は屹度我々の願を聽き入れて守つて呉れるであらう」

數日後妻も漸く同意したので木樵は娘達を死の森へ連れて行つて捨てた。處が娘達は末娘のネアン・ナに導かれ道を辿りて我家へ歸つて來たので父親は再び森の中へ捨てた。

サントメアと云ふ悪魔の女王が今にも餓死せんとしてゐる娘達と出會ひ己が宮殿へ伴つて世話をしようと申出た。未だ年端も行かぬ一人の娘を持つた後家であつた。宮殿へ連れ歸つて色々と美味しい食物を與へ親切に育てた。其内に娘達は成長して美しい娘となつた。サントメアは年上の娘を喰べる

爲め殺す樣に命じて腹減らしに象に乘り散歩に出掛けた。

或森の神樣が白鼠に化けて宮殿の下に穴を掘り娘達に今の話をコツソリ知らせて女王が正門から出て行つた其留守を見計ひ逃げ路を敎へて娘達を遁れさした。逃げたのを知つたサントメアは大變に怒つて番人を亂打し直ちに跡を追はせたが遂に捉へる事が出來なかつた。

或朝アンコール王の奴隷達が泉の所へ水汲みに來た處大木の枝の上に娘達が一夜を明かしてゐるのを見て吃驚した。娘達は疲れ果てゝ其夜を枝の上で過ごしたのであつた。其れを聞いた王は餘りの美しさに心を奪はれて早速宮殿の奥深く圍つて寵愛した。後になつてサントメアは知つたので一策を案じ子供を從者に托し自からは美しい姫に化けて同じように泉の邊りに行き王の前に導かれ難なく王の寵姫と成り終せた。

すつかり魅せられた王は姫の云ふ儘に娘達を墓穴に捨てさせた。姫は墓穴に閉ぢ込める前に娘達の兩眼を拔取る樣、王の氣付かぬ裡に番人にせがんだ。又サントメアは充分に食事を與へぬ樣に見張らしたので不幸な娘達は生れて來る子供を次ぎから次へ喰べつゝ飢餓に堪えてゐた。唯末娘のネアン・プーばかりは自分の子供は死んで生れたと云ひ其證據に飢えた姉達に喰べ殘しの腐つた殘り肉を見せ

て自分の子供だけは助けた。サントメアは生れる子供達が皆片附いたと思つたので少し食料を增した。ネアン・プーは始めて姉達に自分の子供が生きてゐる事を明かして皆で節食した。うまく欺いたのか或は番人が忘れたのかネアン・プーは右の眼だけ殘して居たのであつた。それで何かと盲目の姉達を獨りで生活をした。子供にロチサンと云ふ名をつけた。大きくなると自由に穴から出て誰れにも知られずに歸つて來るようになつた。そして他の子供達と賭遊びをして素晴らしい鬪鷄を手に入れた。いつも勝ち續けて彼は腰が曲る程の多くの食料を携へて歸つて來るので穴の中では食料に事缺かなくなつた。

或日サントメアは鬪鷄に集まつた者達の騷ぎに窓

挿畫　娘人二十のアンコール

際に行つて始めてロチサンを見た。何處か見た事のある顔付きなので竊かに跡をつけさせて始めて分つた。翌日ロチサンを宮殿へ呼出した。或遠い所へ大切な手紙を屆けなければならぬその役を賴みたい、若しうまく屆けて呉れるなら御褒美を取らするぞと命じた。其處でロチサンは皇族の衣裳を着て只一人馬に乘つて出掛けた。或日ロチサンは疲れて木の下で眠つた。通りかゝつた隱者が近寄つて馬の首にかけてある手紙入の竹筒を手にとり封印を剝がして內容を讀んだ、それは惡魔の女王サントメアから娘へ宛てたもので「此若者到着次第直ちに殺せ」と書いてあつた。隱者は其手紙を破つて書換へ「此若者到着次第直ちに結婚せよ」とし上手に封印して隱者は立去つて行つた。

娘ネアン・カングレーは母の宮殿で見守られ庭から一歩も出ずに育てられた無邪氣な娘であつた。或朝娘はロチサンが門を入る事を拒まれて悶著してゐるのを見、そして自分の前へ連れて來られて眞赤になつた。ロチサンは目の前に王女を見て驚ろき馬を下りて一禮した。そして差出された盆の上へ手紙を載せた。それから多くの恐ろしい從者達に從つて大きな部屋へ入つた。各々着席すると手紙の內容如何にやと一座の者は片唾を呑んだ。手紙は一人の老從者に依つて皆の前で朗讀せられた。內容が解かると樂しい騷ぎが起つた。直ちに從者達は王女の婿である此新らしき主人に對して平伏した。

盛大なる儀式が濟んで樂しき二人は大きな木の繁みに皆の目から遁がれて隱れた。

ネアン・カングレーは夫に廣大な庭園や水倉や數知れぬ建物を見せた。二人の散歩が終りに近づいた時妻は一つ離れた小さな小屋の閉された入口の前で不安氣な氣持ちで立止まつた。

「母が最後に私と會つた時私に申したのですが、此小屋の秘密が曝された時は我々の上に不幸や死が襲つて來ると申しました」

妻は鍵を持つてゐる手を震はせてゐた。ロチサンは落ち着かせた。

「開けないでもよろしい、唯此小屋に隱されてゐる秘密だけをお話し下されば、私が此處へ參ります時一言でもおつ母さんが私に注意して置いて下さればよろしかつたのに。」

カングレーは夫に近寄つて囁いた。

「卓の上にある銀の壺には十二人の娘の眼がゴチヤ〳〵に入つて居ます。其傍の小瓶には眼を甦へさせる藥が入つて居ります。壺と瓶との間には元の通り眼を癒やす母の魔法の杖が置いてあります」

ロチサンの顏に見る見る涙が流れた。

「貴方樣如何なさいましたか、私最う此話をよしませう」

ロチサンは何氣ない顏付きで妻を誘つて其場を去つた。

其夜食事の時ロチサンは妻を醉はして寢かせ鍵を奪つて小屋から眼と藥と魔法の杖を盜み出しサントメアの娘の無邪氣な額に接吻して逃げ出した。其れを程經て知つたカングレーは直ちに馬に乘り從者を引連れて夫の跡を追驅けた。ロチサンは遁走の途中で彼の知らぬ間に出會つた隱者に遭遇した。隱者は呼びかけた。

「お前の目的に進め、若しお前の妻が追ひつくならばサントメアの杖によつて空間を渡る事が出來ると云ふ事を思ひ起せ、若し何處迄もついて來るならば此處にある此小杖を地面に投げよ」

妻は大急ぎで來たので間もなく近かづいた。彼は近づくのを見て魔法の杖を右手に握り馬諸共空高く躍り上つた。そして馬を止めて振り返り乍ら「何事も忘れて呉れ、之れが最後のお別である」と告げた。而しカングレーは哀願した。若し拒むならば何處迄もついて行くと云つた。ロチサンは言葉も返さず馬を躍らせた。そして別離の涙を流しつゝ張りさく思を堪えて隱者の小杖を地面に投げた。忽ち娘の足許に大きく大地が凹んで瞬くまに小川の水が流れ込み湖と化した。

ロチサンは父の王宮に歸り有の儘を王に訴へて女王の假面を剝ぎ魔法の杖にて原の形に變らせ惡魔を退治した。次いで十二人の娘の眼を治し目出度く王宮に連れ戻しそして再び昔の恩澤を受くる樣になつた。

唯一人の世繼である息子を留めて置かうとする王の願も無益であつた。ロチサンは皆の者に別れて僧籍に入つた。

ネアン・カングレーは夫が見えなくなる迄湖の邊りで夫を呼び續けた。而し地平線の彼方に見えなくなつた時從者達を歸らせて木の下で一人靜かに死の眠りに入つた。（終）

二、ロチサン

僧籍に入つた王子ロチサンは新生活に入つて今迄知らなかつた凡ゆる智識を會得し人々の幸福を求めて巡遊した。彼に近寄る皆の者からは心の優しさ天性の麗はしさを慕はれ懐かしまれた。特に天賦の才能によつて目に見えぬ磁石の如く人々の心を引きつけより一層幸福を與へた。

彼は清冽な小波の立つてゐる小川の畔に足を留め喉を濕ほすため菩提樹の葉を取つて水を掬はうとした時水差を持つた若い女奴隷がやつて來た。

「優しい子供よ私に水差で水を飲ませて呉れませんか、貴方は何處へ水を持つて行くのですか。」

女は小川の水を掬み水差を差出した。

「私は御主人の沐浴の水を掬みに參りました。私の御主人は王様の次女で皆の者から愛され尊敬されて居ります立派な王女様で御座います」

ロチサンは水を飲んで厚く禮を述べた。

◇

女奴隷は王女の體に水を流し乍ら物語つた。

「私が水を掬うて居ります時異國の立派な殿方が岸邊に佇んで居りました、そして私に水を飲ませて呉れと御依頼遊ばしたので此水差から水を與へました。あんな優雅なまなざしの人を未だ見た事が御座いません」

其時王女は髪の毛の中に何か小さな物が落ちた様であつたのでそつと手に取つて見ると指環なので急いで掌に隠して

「水差に今一度水を入れて來てお呉れ、その人が未だ岸邊にゐるか見てね、そして何をしてゐるのか私に知らせなさい、」と云つた。

水を汲みにやつてから王女は考へた。

「此立派な寶石は必つと其人の指環に違ひない、其人は私の話を聞いて意識して大膽に水差の中へ辷り込ませたのか或は水差から水を飲む時指から神様が私に定めて居る許婚者を知らせるため落したのか、何れにしても召使が歸つて呉れば分かる」

召使は歸つて來た。

「私は其人が涙を流し乍ら優しき母からの贈物である大切な指環を探がして居るのを見ました、其人は私にも探して呉れと頼みました」

王女は召使の報告を聞いて考へた。

「若し彼が狡るい人間なら只單に下劣な計畫の結果を待つて居たであらう、私は眞實に失なつたものだと思ふ、其人の失くした事は神樣の意志であらう、私は神樣の御趣旨に力を籍さねばならぬ」

次で召使に命じた。

「其人の所へ行つて斯樣に申しなさい、最早お探しにならぬ樣に、貴方樣の失なつた指環は此國の王樣が貴方樣に娘との結婚申出に御同意なさるゝ時に始めてお見附け遊ばすでしよう」と、

王は既に年頃になつてゐる娘に拘らず次々に現はれる求婚者達から婿を撰ぶ決心がつかない。王は解決困難な問題を課したり或は又超自然的な行爲を強いたりして求婚者達を失望させた。又娘も誰にも心を向けなかつた。

ロチサンが宮廷に現はれた時體からは勇氣と熱意が溢れて居り、眼ざしは相手の心を魅了し信頼出來る若者と感じさせた。貴族の或者は云つた、

「終に此處に我々が望んでゐた人が現はれた」

王は考へた。

「自分は此迄に斯樣な若者を見た事がない。確かに此若者こそ娘の氣に入るであらう、而し今直ぐ娘に見せないで置かう、先づ自分が決心する前に或試練を課さう。」

其處で王は大きな米の籠を持參するよう命じロチサンに向つて云つた。

「此凡ての米粒には貴方が見る通り記號がしてある、又數も讀まれてゐる。貴方の面前で凡ての米粒が庭に畠に近くの森に撒かれるであらう、若し其一粒の米も缺かさず明日持つて來るなら貴方の要求を容るゝに値するものと認めよう」

米粒はバラ〳〵と撒かれた。ロチサンは空の籠を携へて小川の畔に歸り膝をつき乍ら祈つた。

「凡ゆる鳥共よ、空飛ぶ虫よ、地上の蟻よ、今地上に雨のように撒かれた米粒を喰べずに置いてお呉れ、私に助力してお呉れ、私の願に邪魔をして呉るゝな」

「國を護る神々よ、若し私が此難解な試練に置かれた王女と結婚する事が人民の爲めに良いと考へるなら何卒私が頼んだ者達へ私の祈りを聞かしめ給へ」

「若し美しき姫が私の前世からの妻であるならば何卒私が成功する樣に靈感を與へて下さい、そして昔或女に行つた不德を此生活によつて償ふようにして下さい」

斯樣に祈つてゐる時木の枝々に樂しい囀りが起つた。凡ゆる鳥が撒かれた米粒を咥えて籠に持つて來た。ロチサンは感謝し乍ら鳥共を抱擁した。其結果に驚ろいた王は翌朝大河の岸へ其籠を持つて行かせたそして米粒を河に投げ込ませた。

「明日其れを持つて來て欲しい」

神樣の加護に依り魚共の加勢を得て成し遂げた。然し數を讀み終つて王はロチサンに

「一粒の米が足らない、直ぐに探して來い」と命じた。

ロチサンは岸邊に坐して魚共に呼びかけた。

「吾友よ、一粒の米が足らぬとは如何した事であらう、砂の中か壺の中か又私の祈りを聞かなかつた魚の中の誰れかが喰べたのかも知れぬ、皆體の中も調べて見て呉れないだらうか、必つと一匹の惡い奴が盜んでゐると思ふ。私の幸福は小さな米の一粒に懸かつてゐる何卒私を幸福になれるようにしてお呉れ」

凡ての魚は驚ろいて顏を見合せた。後ろに隱れてゐた一匹の魚が前に出て來た。

「何卒許して下さい、私が罪人です此處に最後の一粒があります。一粒位は盜んでも分るまいと思つて私は隱しました。」

ロチサンは小指の先きで魚の鼻面をポンと叩いた。忽ち其種類の魚の鼻が曲がつて終つた。後世では其魚に「鼻曲り」と云ふ名がつけられた。

ロチサンが鼻を叩いた日から何世紀經つた事であらう、鼻曲りは未だ許しを得てゐない。乍然毎歲彼等一族は揃つて雨が降り續く增水の時期になると大河のプノムペン(柬甫塞の都)近くキエロル・キヤンパに集まりアンコールの寺院に向つて禮拜し罪を許さるゝ樣集會するのを常として居る。而し同じ場所へ此國の人々は勿論クメル人、ユン人、支那人、回教徒人、其他の國の人々迄が其魚族の目的を妨ぐる爲め集まつて來る。彼等は網で大河を遮ぎるので一匹の魚もアンコールに達する事が出來なかつた。魚族は集會してアンコールに向つて進んで八日目に凡て捕獲されるのである。人々は其不幸を笑ひ全カンボチヤ人に喰べられた。

ロチサンは王の許へ最後の一粒を齎らして長い間探した事を詫びた、感心した王はロチサンに申し

た。

「神の加護深き若者よ、さらば大勢の女達の中から求婚者の小指を見付け出しさへすれば娘との結婚を許さう、其爲には明日食事前に宮廷に暮してゐる女達を大部屋に集め仕切りを通じて小さな穴から指だけを出させよう。そして貴方を指の並んでゐる前を通らせて娘の指をうまく見出すならば食事は婚約の晝餐となるであらう」

ロチサンは興奮に震へ乍ら心の内に祈りつゝ默まつて小さな美しい指の前を通つた。やがてロチサンは或指の前で止まつた。其指の爪と肉との間に「ミレ」の種粒が入つてゐるのを見付けた。直ちにロチサンは膝まづいて其指を握り胸に押宛てた。其時仕切りが開けられると丁度姫の前にあつた。ロチサンは失なつた指環を見付けて喜びの涙に咽んだ。ロチサンは祝辭を浴びせる廷臣達の歡呼と天の音樂に和して王自身より稱讃されてゐる自分を見た。（終）

三、ネアン・ロム・サ・サツク

トマアンキヤンの王の一族である或富豪の兩親が其息子レアクコールを早く一人前になる樣、學問させる爲或有名な隱者の許に伴つた。隱者の許では幼ない時美しい花咲ける睡蓮の上に眠つて居るのを見付けて育てゝ來たネアン・ロム・サ・サツクと共に其草菴で暮して居た。

充分に教育されたレアクコールはサツクを妻に貰ひ受け彼の許を辭した、隱者は彼女が何時迄も若い樣にと立派な寶石入の飾針をサツクに與へた。

レアクコールは暫くして兩親と妻に別れ彼の爲めに父が艤裝して呉れた船の積荷を賣りにコラの海岸に出掛けた。上陸した彼は水浴して居た其國の老王の一人娘ネアン・ミカを見染めた。結婚するや始めて故國に妻のある事を語り自分は少しも好いてゐないのだと打明けた。斯くて幸福の裡に三年經た。娘は母となつた。ミカは夫が子供の爲め財産を齎すように商品を積んだ船に乘つて交易に東海岸に行くと聞いた時、それは結構な事だと思つた。間もなく船は出發した。ミカは食糧を船に積込んだ。

り最後の愛撫や袂別に全く心を奪はれてゐたが、偖て碇が上げられ唯一人となつた時、不圖裏切られ

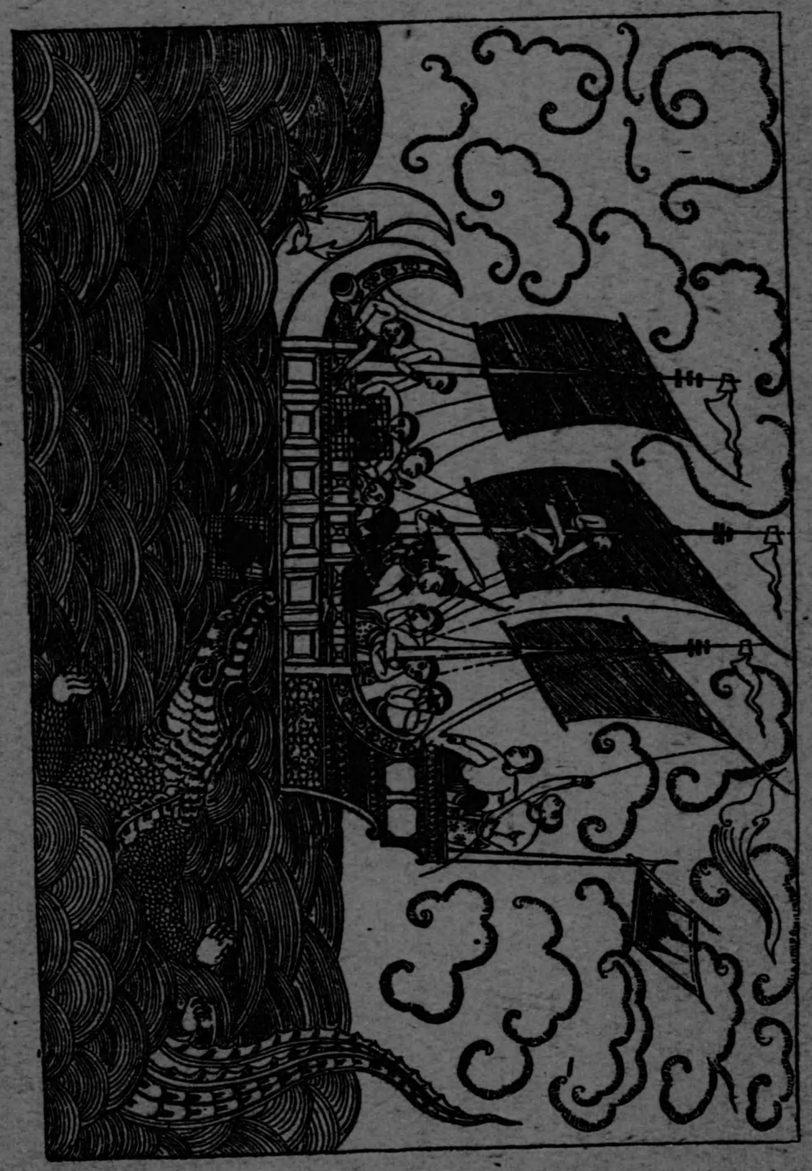
たのではないかと心配した。突然に襲はれた不安で海上を遠く迄見透しのきく高い建物に走つて行き一番高い處に登つた。レアクコールは見て居られるとは露知らず東方への途につかず帆を張上げて彼の歸りを喜び迎える兩親や妻の居る國の方に向つた。

ミカの眼からハラ〳〵と大粒の涙が子供の顏の上に落ちた、欺まされたのだ、夢は破れたのだ、過ぎし事を思ひくやし涙が溢れるにつれ慘酷な怒りが勃然と燃え上り理性を奪つてしまつた。一生を臺無しにした彼が故國に歸つて樂しんでゐるのを捨てゝ置かれようか。

誰れよりも一番早く自分の仇を討つて呉れるのは幼い頃から養なつて來たアトン(鰐)だと氣がつくと直ちにアトンを呼んだ。

「直ぐ追つかけろ、そして私と子供を棄て去つたレアルコールを喰べてしまへ」

レアルコールの長い不在でアンキヤンの家は淋しがつた、サツクは唯一人彼が海で死んだのではないと固く信じてゐた、子供時代から仲の良かつた彼は必ず歸つて來ると確信してゐた。毎日水浴に岸邊へ出た。彼と別れた岸邊に執着を感じて長い間海を眺めた。遠い海上で帆を上げて近寄る船が間遠ふ度毎に慎しみない女召使達は大きな悲膽を地平線に投げかけた。或る非常に晴れた日であつた。爽



ヤ・キ・ン・ヘ・ン・ヒ・ン

やかな微風が吹いてゐた時サックは沖を見てアッと叫んだ。

「向ふに船が、お前達は見えませんか、あの方角では彼の船に違ひない」

サックは夢中になつて喜んだ、召使達は馳せ集まつた。

「確に左様です、前の方に居る御主人を御覽なさい。けれどもどうして水夫達はあんなに動き廻つてゐるのでしよう、彼様に良い天氣に檣に登つたり降りたりして、船は狂つてゐるように右に行つたり左に行つたり、何か危險な事が起つたのでしようか、心配です。アッ、曳船を棄てた。今度は水の中へ鷄や家鴨の籠が投げ込まれた。あー心配です。アッ海に怪物が居る。アッ危い。」

鰐が現はれるや直ちにレアルコールは叫んだ。

「アトン、私を追ふのをやめろ、お前は主人の夫が私だと云ふのを知らぬのか」

「自分は養育してくれたミカのみにしか從はぬ」

レアルコールはそれを知つて船の進みを早める爲め二艘の曳船を捨て、アトンを遲らせる可く鷄や家鴨の籠を投げさせ遁れようとしたが、却つてそれはアトンを怒らせた、一躍で船に飛びかゝる樣になつた。

萬事窮した彼は岸邊に振り向いて妻の姿を認め、手で最後の合圖をした。落膽したサックは機械的に一つの武器を捜し出した。髪を振亂して頭上の隱者から贈られた重いダイアの金留針を外づし隱者に祈り乍ら恐ろしい怪物目がけて投げつけた。それは獸の二十歩手前の海中に落ちた。

其時未曾有の異變が惹起した。寶石針の尖が海底の砂に觸れるや否や水を拂つて土地は隆起しトマアンキアンからダン・レック迄地膚を現はした。岸邊に呼び集められた人々はレアルコールが船が持上げられて停まつてゐる岩山からサックの方へ走り寄るのを見た。

程遠からぬ他の丘陵の上にアトンは叩きつけられ瀕死の叫びをあげた。

「女主人よ、私は死にます敵を討つて下さい」

ネアンミカは多くの軍隊を集め最先に進んだ。コラから半道ばかりクレバンの山の海岸から少し離れたプーテイネアンと呼ばれる岩の近くにミカは軍旗を建てさせ防塞を構えレアルコールへサックと闘ふメッセージを使者に持たしめた。

挑戰に應じたサックは軍勢を驅り集めた、出發に先立つてレアルコールは妻に云つた。

「左様なら、どうか成功してお呉れ」

ミカの軍勢の配置と戰鬪力を探ぐる爲め老兵士ではあるが鬪志滿々のタメウンは最先に出掛けた。嚴重な監視を怠らぬミカは直ちに彼を追ひサックの陣營の見える所迄追つた。最初の戰はトマアンキアンの軍勢を震憾させた。ミカ方に立派な勳功を建てたのは昔の老首長タ・クレーの力であつた。此を見たサックは隱者を心に思ひ浮べつゝ祈つた「私を勝たせて下さい、若し勝てば貴方の山の上に寺院を建てる事を誓ひます」

そこで寶石を纏ひ美しき馬に乘り差出された劍や槍を手に、敵と渡り合ふ爲その亂戰に突入した。

兩方の旗下の兵士隊は如何程强くとも戰に熱がなかつた爲二人の女が爭ふや否や逃げ出し、又他の兵士隊も若し主人が敗けたら直ちに逃げ去らうとして居た。

サ・サックは聊も疲れを見せなかつた。絕對に負けないと自信を持つてゐる樣だと人々は見た。反對にミカは傷つけられ力が追々と弱つて來るようで部下の兵士達が代つて戰つてくれたらその隙に少し休めば敵に負けないのにと考へた。秘かに首長や兵士の方を眺めたが躊躇してゐるので、大聲に呼んだが身替りに出てくる者はなし、防ぐ事の出來る陣營にも退かず四方八方へ散つてしまつた。サ・サック側の勝利の應援にミカは最早自分の勝利の望みを持ち得ぬ事を感じた。遂に敗れて殺されんとしてミカは祖父に托してゐる子供の事を思ひ浮べた。今一度子供に會ひ度くなつた。武器を捨てミカは山に向つて馬を走らせた。新らしく隆起した地層の現はれた地は身を隱す術もなかつた。サ・サックはベアルネアンノヲウム(涙に泣く若き女の原)の原に追ひつき捕えて縛つて陣營に引連れおもむろに拷問した。そして首を斬らせ長い竹の先につけさせた、次で自から死人の腹を抉り割き臟腑を從者達に細かく切らせ遠くの地上に投げ捨てさせた。

サックは意氣揚々と凱旋した。王は子供がなくて崩じたのでレアクコールが王位に卽いた。

二人は老隱者の許に行列を作つて危險の最中の約束を果すため小山の上に九重の塔のある立派な寺院を建立した。其後此小山はバムナン(祝)と呼ばれた。

此事件の後はカンボチヤではミカの名は妾の同意語となつた。

四、ネアン・カケイ

妖精クルートの女王から生れたプラプティ・サアトは強い王となつた。素晴しい宮殿に住ひ數々の廣大な庭園を持つて居た。其國には森林あり海あり大變美しい國であつた。彼は王子の姿になり精靈の形になつたり、種々思ひ通りの形に變る事が出來た。妖精仲間では彼の右に出づる者はなかつた。彼は森の木の實を喰べて生きて居た、氣慰みに毎週プロマタツト王國に下りた。人間の姿ではメアーノツプと云ふ名を名乘り無花果の木の傍に下り宮殿の近くを歩き廻つた。或日彼は王に出會ひ將棋を指しにくる樣にと招かれた。彼は大變上手なので王の氣に入つた。其後地上に下り立つ毎に將棋を指しに出掛けた。或時將棋を指してゐる間に王の愛妻ネアン・カケイをチラツと見た。彼は心に思つた地上に斯んな美しい女が居やうとは天國にも較べる美人は居らぬであらう。彼はカケイに夢中になつた。カケイも同樣彼を愛する感情を示した。カケイは彼の後を追つて宮殿から逃げやうとさへ考へた。メアーノツプは夕方迄將棋を指して無花果の木の下に歸つたが、其處から再び飛び立ち宮殿へ取つて返した。

カケイは彼が歸つて來るのを望み乍ら庭園を散歩して居た。誘拐を知られぬ樣に彼は嵐を捲起し腕にカケイを抱へ空に躍上り連れ去つた、そして遠く離れた七つの海がある廣々とした平野の中の山の上に連れ歸つた。初めの間は誰もカケイが居なくなつたのを知らなかつた。而し嵐が靜まり夜が來た。カケイは美しいが決して威張らぬ優しい氣質に心から侍づいて居た侍女達が始めて氣附き探したが見當らず涙乍らに其悲しみを王に訴へた。

自分の國に歸つたサアトはカケイを宮殿や庭園や水の流れ等を案内した。カケイは不安氣なので彼は過ぎ去つた事は忘れなさい、茲は二人限りだ安心して樂しく暮しなさいと云つた。

プロマタツト王はカケイはメアーノツプに奪はれたのに違ひないと考へ友の精靈コオトオンに告げた。コオトオンは王に答へた。

「一週間お待ちなさい、ノツプが貴方の許を辭す時に私は昆虫に變り彼の羽根に飛び乘つて彼の住居に行きませう、そして又彼と歸つて來て私の見た事をお話致しませう」

終日ノツプはカケイと散歩した。森では木の實を採り、川では泳いだ。カケイは全てを忘れて終つた。

疑はれてはと思ひ掠奪者は七日目に何時もの訪問に出掛ける爲めカケイに別れを告げ、浮氣せぬ樣に戸を閉し空中に消えた。無花果の下で彼はメアーノツプとなり、宮殿に出掛けて叮重にもてなされた。二人が將棋してゐる時コオトオンは側に居り王と別れた時知られぬ樣にして木の下迄後をつけた。偖而サアトが元の姿になるや直ちにコオトオンは小さな昆虫となり、羽根に飛び乘り彼と共に空を驅り、間もなくカケイを見たので占めたと思ひ隱れた。歸り着くや直ちにサアトはカケイの爲めに離れた森で夜になる迄木の實を集めた。其間にコオトオンは現はれ、カケイに近づいて自分が慰めに來た事を告げた。コオトオンもカケイを愛してゐた、サアトが留守になる度毎に二人は抱き合つて愛に溺れて居た。一週間過ぎてサアトはコオトオンに氣付かずウマ〳〵と彼をプロマタツトの國に連れ戻した。王はメアーノツプを認めた時將棋を準備させた。二人が將棋を始めた時、コオトオンは入つて來て樂器を手に坐して唱つた。

「ノツプの住居は素晴らしい、カケイは益々美しい、體は花より一層芳ばしい香氣を發してゐる。私は七日唯一人カケイと過ごした。カケイの愛に抱かれて、夜はカケイはノツプの傍で寢んだ。私も亦妙なる香氣に浸つた!!」

ネアン・カケイ　挿畫

ネアン・カケイ　挿畫

唱える話を聞いてノップは恥と怒りに直ちに立上り自分の住居に歸つてカケイを詰つた。

「浮氣女奴、お前を王の許に連れ戻さう」

カケイの切願に心重くはあつたが涙に頓着せず宮殿の戸口に連れ戻し永遠に消え去つた。

プロマタツト王はカケイに對する愛はさめてゐた。番兵達が王の許に連れ行き恐れ震へて居る彼女が涙乍らに平伏したが、怒れる王はカケイを殺してしまはうと思つた。王はカケイを準備された筏の上に乘せ波のまに〳〵海の中へ捨てる樣に命じた。死を恐れたカケイは主人の許に匐ひ寄り哀願したが、王は番兵に早く命に從はぬかと難じ速座に縛つて連れ行く樣嚴命したので、不止得カケイを縛り岸邊に伴ひ筏に乘せ流れの中へ押しやつた。

カケイは潮に乘せられ沖へ流れて行つた。深潭に棲む怪物を波の中に見た時、戰慄し氣絕した。筏は覆かへりカケイは終に捲込まれてしまつた。(終)

五、メ ア・ユ ン

昔遠い國にプロントと云ふ名高い王樣が居られた。寵愛の后は絕世の美人で美しい侍女達が數多く宮仕へをしてゐた。其國の首長、僧侶、占者、豫言者達も皆有能の者ばかりで國土は安穩に人民は幸福に暮してゐた。此治世の惠みを受けて暮してゐる一人の貧乏な男がゐた。妻は大變に美人であつたが虛榮心が强く貪慾で井戸端仲間から嫌はれてゐた。

或日二人は漁(スナドリ)りに出掛けたが笊は古く穴が開いてゐるので魚は皆逃げ出して終ふのである。二人の傍で船頭がヂツと眺めてゐた。船頭の妻は夫に云つた。

「此貧乏な人達は壞はれた道具で魚を捕るとは全く量見が知れない」

船頭は出拔けに妻に云つた。

「お前は彼奴の妻になれ、俺はあの美人を妻にしよう」

「それでは私がお前に似合はぬと云ふのなら、又あんな貧乏女でも良いと云ふのなら私は別れませう。私はあの人の妻に代りませう」

船頭は直ぐに漁夫に合圖した。

「此方へ來なさらんか、折り入つて話し度いものだが」

貧乏人は妻と恐る恐る近寄つた。

「どうだ、妻を取替えんか、俺の妻をお前にやるからお前の妻を俺に呉れ」

漁夫は吃驚して聲も出なかつたが、船頭に促がされて

「私は全くの貧乏人です。貴方の御意志に反對する事は出來ません」

船頭は喜んだ、壞れた笊を持つてゐる漁夫の妻に話しかけた。

「どうだ美しいお前さん、お前さんはどう思ふか」

漁夫の妻はいつも金持を憧こがれてゐたので「お好きな樣に」と答へた。

話が纏まつたので船頭の妻は着のみ着の儘で船から下りた。そして漁夫に近寄り甲斐甲斐しく笊を手に取り洗ひ乍ら尋ねた。

「貴方には兩親や親類や友達をお持ちですか、子供や從兄弟等は、何卒話して下さい」

「私は誰も持つておらぬ、之れで家庭も無くなり全く不幸な者です」

船頭の妻は不憫に思ひ貧乏も苦にせず共稼ぎをしようと二人は夫婦になつた、やがて貧乏な男の家は凡てが變つて來た。近處の者はどうして斯樣な忠實な妻を見付けて來たのかと不思議がつた。妻は船頭達が森の材木を高價に買ふのを夫に話したので夫は毎日森の木を集め船頭に賣つて段々と暮し向きも樂になつた。

其頃王樣は大狩獵を催す布令を傳へた。漁夫は其事を妻に語り人夫に傭はれる爲糧食の用意を頼んだ、妻は夫の爲めに素晴しい食物を工夫し乍ら「王樣は多分狩に夢中になつて家來達から離れられるでしよう。貴方は絶えず王樣を見失はずに隨いて居りなさい」と云つた。

オンボペアンの森に着くと、果して王樣は狩獵に夢中になつて從者達の事も忘れ獲物の跡を追ひ廻した。餘りの暑さに王は無花果の木蔭に馬を下り從者達の追ひつくのを待つた。然し唯一人の男が王樣の側に從つてゐた。王樣は其男が敬々しく一禮して側に控えてゐるのを見て指し招いた。

「從者達は散らばつて仲々やつて來ない、私が此處に居るのを見付けるかどうか分らない、私は咽喉が渴くし腹が減つて來た、アー堪らない。」

メアユンは平伏して申上げた。

「王様、私は澤山に米飯を用意致して居ります。お好みは何と云ふ米飯でしようか、でも私如き持物をお召上りになるでしようか」

「良くとも悪くともそれで良いから私に喰べさせて呉れぬか」

「水も澤山御座いますが、お呑み下さいますか」

「早く呉れ」

メアユンは急いで米飯と色々な食物と水を差出した。何もかも王宮で調理する料理と同じく大層美味であつたので王はいたく感嘆して

「オー、是れは全く美味しい、お前の妻は大層料理が上手と見へる、斯様なお美味しいものを何處で手に入れたのか」

王様は水を飲んだ、それには香がつけられて味が又一段と良かつた。

「お前の妻が夫の爲めに斯様な美味しい食事を用意するとは驚ろき入つた事である、サー次にお菓子を貰はう。」

メアユンはお菓子を差出した。何一つ缺くものがなかつた。

「有難う感謝する。宮殿へ歸れば早速お前を取立てゝやるであらう」

王様は無花果の木蔭でスヤスヤと眠られた。

扨此木は森の中の最も恐ろしい精靈が集まつてゐる棲家であつたのである。勿論王様は何も知らずにゐたが棲家の上に長々と寢そびられて自尊心を傷けられた精靈は近くの仲間を呼集めて言つた。

「王の眠つてゐる上に此無花果の枝を折り壓し潰してしまはう。此王は私共に何の挨拶もなく木蔭に腰を据え、吾家を冒瀆するとは怪しからん仕業である。若し王が遁れたら我々は一擧宮殿を壞はし下敷に埋めてやらう。又若し他の精靈に依つて救はれたら蛇になつて寢臺に近附いて嚙殺してやらう」

仲間は意見一致した。そして直ちに着手した。大きな枝はメリメリと音がしだした。メア・ユンは彼等仲間の話を聞いて直ちに王を起した。王は馬に飛び乘り急ぎ宮殿指して鞭をあてた。着くや否や近臣、首長に其旨を告げ城から遁れ出た途端城壁は轟然と崩壞した。王は形勢非なれば直ちに救ひの神の來て頂く樣祈願し、救護を求め別の城に向つた。

メア・ユンは我家に走り歸り妻に有りし事共を詳さに語り聞かせた。ユンは急ぎ食事を濟ませ懐刀

を携へ宮殿に馳せ參じ王並后の寢室の傍で注意深く御警護申上げた。近臣、首長達も王の警衛に任じでゐたが、眞夜中となると其日の疲れで皆深い居眠りに陷入つてしまつた。其時恐ろしい蛇が現はれ鎌首をもたげて進んで來た。目覺めて居たメア・ユンは突差に懷刀を拔いて激しく蛇の頭を打碎いた。そして胴體を細々と切つて寢臺の下へ押し入れた。迸しる血沫は御寢の女王の胸や咽喉の邊りに飛びかゝつた。メア・ユンは「蛇はこれで退治して終つた、而し女王の體は血で汚れて居る、どうすればよいのか、手で拭ふのは禮を失する、淨くするのは只唇だけである」と獨語し乍ら身を屈めて唇でソッと其汚れを拭ひ去つた。

不圖目を覺ました王女は恐怖の叫びをあげた。

「王の從者メア・ユンが私の咽喉に唇で觸れた」

王は驚ろいて飛び起き兵士や死刑執行人達にメア・ユンを捉えて速座に死刑に處する樣命じた。眞夜中であるが執行人達は南門に罪人を連れ行き門を開く樣に命じた。番人は驚ろいた。夜中の死刑執行は昔から法律や慣例に反してゐる。

「王樣の御命令である、仰せに從ふ以外どうすると云ふのだ」

番人は執行人に言つた。

「然し斯樣な事を御存じありませんか、或子持の女が貂を大變可愛がつて飼つて居たが、或日子供をハンモックに入れて貂に番をさせ乍ら買物に出掛けた、偶々恐ろしい蛇が子供めがけて咬みつかうとしたので貂は飛びかゝつて蛇を嚙殺した。母が歸つて來て出迎えた貂を見ると血だらけになつてゐるので吾兒を殺したものと早合點し、撲殺してしまつた。次いでハンモックに走り寄り吾兒の無事な姿と傍に蛇の死骸を見て誤つて貂を殺した事に氣付き嘆き悲しんだが既に手遲れであつた。私としては法を曲げる事は出來ませんから他の門へ行つて下さい」

執行人は東門に行つた、番人は同樣開くのを拒絕した。そして云つた。

「或金持が大層忠實な犬を數匹飼つて居た處、或夜の事盗賊が押入つて財寶を奪つた。犬は盗賊の後ろから隱場所迄つけて行つて咬殺した。翌朝主人は財寶を盗まれて居るのを知つて叫んだ。日頃犬を大切に養つてゐるのに盗賊の取るに委せておいたとは何事だ恩知らず奴、生かして置く譯に行かぬ。やがて盗賊の死骸は腐敗し始めた、主人は其臭氣は犬の臭氣だと思つて居たが、犬は遠い森の中に埋めたのだと知つたので其原因を探させた。直ぐに盗賊の死んで居る洞穴は發見され財寶は

其儘手もつけられずあるのを知つて金持は長大息した、私は間違つて最上の動物を殺させたとは何と不幸な事を仕出かしたものだ」と、我々はブロンド王を尊敬して居ります。然し此主人の如く王も後悔されるのではないかと思はれる、我々は法に從はねばならない、門を開ける事は出來ない」西門でも番人は開らかうとはせなかつた。

「次の事に御注意願ひ度い、昔或國王が鸚鵡を飼つて居た。或日の事鸚鵡はエンホペアンの森の方へ飛び去り不思議な美しい色彩の羽毛をつけて歸つて來た。餘りの美しさに王は鸚鵡に其由を訊ねたら鸚鵡が云ふに私は幾ら年を經つても若さを失はぬと云ふ檬果(マンゴウ)の實を喰べたのです、と其處で王は鸚鵡よ私に其果物の一顆を取つて來て呉れぬかと願つた。鸚鵡は直ちに飛び去り檬果を持ち歸つた。若し私が此果物を喰べても要するに私獨りが其恩惠に浴するだけだと、王は獨言を云つて樹とする爲、又凡ての者に幸あらしむ爲めに地に植えた。終に花が咲き實が成つた。王はそれを家來達に喰べさせた處が皆中毒して死んで終つた。何と質の惡い鸚鵡だ、私を殺さうとしたのだ。怒つた王は鸚鵡を捕えて即座に殺した。以後此恐ろしい果物には誰も手を觸れなかつた。長年の後、王室の象の番人であつた貧しい暮しの夫婦が我々は年寄りになつた、何の慰安も希望も無い生活を一日延ばしに暮してゐるのだ。死ねば我々は幸福になるであらう。毒の實檬果を喰べようと語ひ乍ら夫は先づ果物を喰べた、驚ろいた事に彼は力が溢れ美しい若者になつた。妻も喰べた、美しい若い妻が現はれた。妻は驚ろいて叫んだ。アッ此迄私は哀れな老婆で沼の鰐のやうに堅い膚であつたのに貴方は又白髪さへ僅かに殘り曲つた背をしてゐたのに、之は何とした事か、王樣は象番が美しい上品な夫婦となつたのを見てどうした譯かと訊ねたら、夫婦は一切の事を申し上げた。奇蹟の原因は此檬果なのか、王は早速其果實を取寄せて從者達に與へたら皆は突如として若返つた。其處で樹を調べさせた處が其樹の下に蛇が洞穴を作つて棲んでゐたのを見付けた。蛇の毒が其樹や果實に迄傳はつてゐたのである。蛇が居なくなつて果物は再び其力を示めしたのであつた。王は可哀相な鸚鵡の死をどれ程歎き悲まれた事であらう。」

北門の番人は執行人達に云つた。

「皆さんの希望は法を犯す事になる、朝になる迄お待ちなさい」

此間ブロント王はイライラし乍ら部屋の中を歩き廻り獨り云つた。

「メア・ユンは私に忠實に仕へて呉れた、オー輕卒な事をして終つた、今慰らく考えて事を成せば

よかつた」

王は命じた。

「四つの門の所へ直ちに行け、多分メア・ユンは未だ生きて居るであらう、彼を連れ戻して來い」

間もなくメア・ユンは王の前に現はれた。王はヤレヤレと思ひ後悔し乍ら

「メア・ユンよお前は森の中で良く仕へて呉れた。どうして私が斯様に信頼して居乍ら心變りがしたのであらう」

「おー王様私がお側で見守つて居る時、蛇が王様を殺しに參りました。私は氣が付くや否や懐刀を取出して直ちに殺しました。其時血沫が女王様にかゝりましたので、手を觸れるのを恐れて唇でその汚れた血を吸ひとりました。私は死罪を命ぜられました。私は王様に抗辯をしようとは思ひませんでしたが、四方の門の番人は皆私に心寄せてか開く事を拒絶致しました」

「では其蛇の死骸は如何致したか」

「女王様が御目覺めの折御覽になつてはと思ひそつと王様の寢臺の下へ押し込んで置きました。」

蛇の死骸は出て來た。王は蛇を見て戰慄し乍ら申された。

「私が助かつたのは全くお前のお蔭である。私の怒りと馬鹿氣た輕卒を許して呉れ、あー私の友達は實に勇敢である」

直ちに王は彼に最高の名譽を與へ法を正しく守つた番人達へも夫々の賜物をなした。

◎

メア・ユンは立派な妻を持つた爲めに斯くの如く出世をした。彼から離れた美しい妻と船頭は如何なつたであらう。女は唯金持の夫を望んで節約を考えなかつた。二人の間に男の子が生れたが萬事召使達に委せ切りでウカウカと暮してゐた。段々と全財産は浪費で消えて終ひ今は米にさへ事缺く貧乏に陥入つてしまつた。そして働く決心もなく軒から軒へ食を乞ひ乍ら、或日メア・ユンの門口に立つた。メア・ユンの妻は彼等を見付けた、彼等はメアユンの家だと知ると、恥しくてコソコソと立退く間メア・ユンの妻は不幸な二人を見送つてゐた。（終）

六、サンセルキー

世界で最も勝れた國王を父に持つ王子コトラツクは或日美しくて優さしい妹モンテアを宮殿近くの森に伴れて行つた。モンテアは侍女達と樂しく嬉々と遊び戯れた。其森は宮廷の庭より遙かに廣々とし、そして綺麗であつた。王子は其夜、侍女達と憤怒と失望と慚愧に心亂して宮殿に歸つて來た。妹モンテアは偶々通り合せた惡者の王の爲めに侍女達の油斷に乘じて遠い惡者の國へ連れ去られたのであつた。老齢の王は可愛い子供を失つて落膽の餘り到々此世を去つて終つた。後に殘つた不幸な兄は悲歎の涙に暮れた。彼は妹を取卷く侍女達に不圖心を奪はれて何等用心をせなかつた自からを責め妹を奪はれたのは何と云つても自分の迂濶に外ならぬと考へると一層胸が痛んだ。そして妹を取返す事の出來ない己れの無力を歎いた。斯くて悲歎の裡に崩去した父の爲めに行はれた崇嚴な葬儀の立派さも、全隣國から集まつた王達の前で行はれた壯觀なる卽位式も、己が激しい悲しみを減ずる事は出來なかつた。又同じ年頃の娘を見ると惡者の屋敷に居る可愛い妹を思出すのであつた。そして絶えず妹を取戻し憎む可き惡者を懲らしめる事のみを考へてゐた。此企ての爲めには將來大きく成つた異母兄

弟の六人の子供を遣はさうと決心した。此時王宮に一事件が持上つた。コトラツクが愛してゐた若い二人の女が美しい子供を生んだ。處が一人の子供は生れた側に弓と短劍と大きな生貝が發見せられ、他の子供は不思議にも段々と小さな獅子に變つて行つた。それは物語に聞く「レアシエアセイ」（麒麟獅子）に變つたのであつた。驚ろいた王は直ちに卜者や學者に相談した。然し他の女連に買收されたト者や學者は此有樣は卽ち此小さな王子は獅子に助けられ軍人となるであらう。そして此王子は王位を獲得し、六人をば逐拂つて終ふであらう。須く王の利益の爲、人民の幸福の爲、此國から母子諸共追放するがよろしからうと進言した。コトラツクは大なる災厄を恐れる餘り、己れの明智を覆はれて二人の女にも會ひもせず、國境より遠く子供と共に棄てさせた。追放された彼女達はサンセルキーと名付けられた子供と、子供の弓と劍と生貝のみを持つた儘、獅子を連れて神樣が作られた森の中の荒れ果てた寺院を假の住居とした。そして獅子に番せられ自然の果實や草の根を喰べて生活をした。その中に世間からすつかり忘れられて終つた。

長い年月が經つた。奪はれた妹の思出にいつも惱んでゐたコトラツク王は、六人の兄弟達が漸く惡者を見出して鬪に勝ち、叔母に當るモンテアを取戻し得る年齢に達したと思つたので、愈々取戻し役

に出發の命令を發した。六人の若者王子達は此難事業に自信が無かつた。彼等は易々と宮殿で母の許に成長し、宮殿や寶庫に貯へられた莫大な財寶を分けて貰ふのが唯一の樂しみで、全く無用の長物であつたのである。從つて六人の中誰一人此企てに乘出すのに適當の者がなく、又六人共王の機嫌を損じるのを恐れて明らかに其適任で無いと告白する者も無かつた。乍然王を滿足させる爲に嫌々乍ら內心はビク〳〵もので意氣揚々と父の許を去つて行つた。王子達は國境近くに來た時、お互に議論許り戰はし、肝心の戰意は皆目無かつた。そして昔宮殿から追放した小さな弟が成長して、今頃は强い男になつて居るであらうと思出した。若し見出す事が出來れば恐らく我々の助力者になつて呉れるであらう。其處で皆は急に弟を探し廻つた。

二人の母の消息は皆目分らなかつた。誰れも自から進んであの陰慘な森に分け入つて探り出す案內役を務める者は無かつた。其森は野獸が橫行し恐ろしいヤツクやナガ(猿面蛇身の惡靈)が森を支配してゐた。唯一人非常に弓の達人で勇敢な獵師が時々物々交換にやつて來るのみで、彼以外は其森に何が棲んでゐるのか誰れも知らなかつた。六人の息子は心待ちに其獵師を待つて居たが、到々會ふに到らず失望落膽して一先づ引揚げる事に決めた。

◎

ナガ(蛇)の王がヤツク(猿)の王の唯一人の子供である娘に結婚を申込んだ。萬事が整つて許嫁の女に自分の廣大な領土を見せる爲、未來の夫の住民に伴はれて行列麗はしく出發した。處が突然暴風が吹き捲くり行列は大混亂し王女ソンポアを乘せた象は森の中に逃げ込んでしまつた。ソンポアは大虎の洞穴の前の地上に振り落されたので、虎は獲物御座んなれと一躍飛びかゝつた。丁度其時一人の若い獵師が何時でも弓が引ける樣用意して虎を狙つて居た。若者は以前から其虎を知つてゐた、虎が動物を捉えるのはそれは虎の餌食として神が定められたものとして大目に見て居たのであつたが、突然目の前に落ちた人が恐怖の叫びをあげるのを聞いて彼は矢を放つた。矢は虎の頭を貫いて忽ち虎は死んで終つた。彼は王女の側に目を飛び出して橫はつてゐる虎の上に飛び乘り矢を引拔き、恐れ慄く王女の膝下に一禮して從者達が救ひに來るのを見て森の奧深く姿を消した。此椿事の爲旅行は中止となり、死んだ虎の皮を剝いで象に積み王女を母モンテア女王の許へ連れ戻した。

若いソンポアは母に話した。

「お母つさん、天の使者が私の命を救つて呉れました。自然の儘の衣を纏ひ動物のような肌をして

私に一禮して森の中へ逃げ去りました。誰れもあんな立派な人を見る事が出來ないでしよう。私は大變恐れ慄ひてゐましたのでやつと有難うと云つただけでした。」

次で涙を流し乍ら「何時かは私がナガの王のものとなるのでしようが、私は堪えられません」と訴へた。

◎

王に追放せられた女王達は假住居としてゐる森の中の荒れ果てた寺院で、獅子に見守られ慘めな暮しをしてゐた。そして唯一の望みである愛する子供が毎日歸つて來るのを樂しみに待つてゐた。サンセルキーは強く、勇敢であり、又賢明であつた。母親は立派に育てあげた。彼に勝さる王子はなかつた。彼は絶えず走り廻つてゐる森の中で、森の精より特異な能力を授かつてゐた。全く彼は天の加護を受けてゐたので母親がついて居らず共心配はなかつた。而し彼は母親達の傍にゐる時が一番幸福であつた。彼は矢を支へる事なく即座に射り得る不思議な弓によつて、容易に目的物に當てる事が出來又彼の短劍は刀を構えずとも持主に何者も近づく事が出來なかつた。又美しき生貝は必要の場合直ちに彼の前に道の方向を線引いて示した。

彼は母の假住居へ急いで歸る途中出會した出來事の思出に夢中になつてゐた。小川を渡る時、水の上に己が姿を眺めた。そして己れの着てゐる獸皮と、彼がチラツと見た美しい王女の見事な衣裳とを比較して見て悲しくなつた。彼は流れの前に坐つてそれから水浴をした。彼が水浴してゐる間に森の精が小川の傍に脱ぎすてた獸皮と立派な衣服とを置換えた。そして小さな棒切れに次の樣な事を書いた。「お前は王の命息である。王子の衣裳を身につけよ」

◎

一方王子達は引揚げの途中で道に迷つて終つた。惡者達の玩弄物になつたようで、彼等は森から遁れやうとして一層森の奥深く迷ひ込んだ。或日彼等は追放者の假住居近くへ餓えと渴とで死にさうになり乍ら、然かも野獸の咆哮に震え上り乍ら辿り着いた。やつと保護されて生命の救はれたのを感じた彼等は各々身分を告げた。そして此處が哀れな女達の假住居であるのを知つて驚ろいた。漸くにして最初の目的を達した事を喜んだ。即ち助力者を求め得たのであつた。乍然今更宮殿にも歸る事が出來ないのをよく知つてゐる母親達が、自分等の計畫即ち息子を遠征に出す事を拒絶せぬかと怖れて彼女達へ僞はつて話した。

「王の命令に依り我々は貴方の息子サンセルキーを供とする事を要求する。我々と共に愛する叔母モンテアを救ひに行かねばならぬ」

彼女達は斯様な生活をしてゐても教養を忘れなかつた。大きな驚ろきも悲しみも面に表はさなかつた。そして唯一の支持者を手離す苦痛や悲歎は、王に依つて息子が立派に見出されるであらう事を思つて堪え忍んだ、其處で息子が同意するなら旅に出さうと應諾した。

サンセルキーは黄金でピカ〳〵と輝いた衣服を着て小屋に歸つて來た時、六人の兄は眼を瞠はつた。又非常な變り様に驚ろいた母達は心から喜び讃めたゝへて其理由を訊ねた。彼が語り終えた時、今度は母親達の方から事件が持上つた事を語つた。若しサンセルキーが叔母モンテアを見付け得るならば再び親達は王の寵愛を受ける事を望んでゐると云ふ事を語つた。サンセルキーは其使命を果す事を喜んだ。翌朝直ちに貝を携え立派に武裝して兄達を案内すべく先に立つた。哀れな母親達は一縷の望みを抱く一方、息子への心配の爲め獅子を其保護に連れ立たせた。サンセルキーは苦しい遠征を寧ろ樂しみにしたが、兄達にとつては別物である。彼等は日常經驗した事もない勞苦に全く疲れ果て小さな障害にも忽ち勇氣が挫けてしまつた。

或る山の頂きで大きな數匹の蛇が其行手を阻んだ。彼等は忽ち逃げる事を考へた。サンセルキーは直ちに其怪物を追拂つて兄達を安心させた。矢の咆る響きは凡ての敵を恐れさせた。兄達自身もサンセルキーに恐怖を感じ、驚ろきの眼を瞠つてゐた。そして彼を供に連れて來たのは何の役に立たせる爲めであつたのかと、今更の如く自問自答した。彼等はサンセルキーを助力する代りに反つて窮地に陥入れやうとした。其處でサンセルキーは兄達の心を害ねないで、途中の安隱な場所で待つてゐて貰はうと云ふ機會を望んでゐた。機會は數日ならずして到來した。大河が行手を阻ばんだのである。小舟もないので六人の兄は渡る事を誘めた。其時、サンセルキーは叔母を救ふのを自分一人で出掛ける事を申込んだ。それで獅子を番に留める事になつた。全くサンセルキーに取つては好都合であつた。サンセルキーは貝に乘り波を越へて向岸に着いた。

其近くには惡者の一味が住んでゐた。丁度其家は貝によつて引かれた道筋の途上にあつた、サンセルキーは躊躇せず其家に踏み込み怪物を引起した。惡者は殺さんものと挑みかゝり、彼の跡を追擊して來た。其時神が突然彼の眼前に現はれた。神は一輛の戰車の上にサンセルキーを坐らせ二匹の軍馬を御し乍ら一直線にヤツクの王コンポンの宮殿の入口に乘りつけた。コンポン王は雲に乘つて何處か

へ出掛けて留守であつた。ネアンモンテアは優雅な王子が周圍一面に設けられた障害物を乘越へて此離れ家に近づいて來るのを見て驚ろいた。然かも其若者が自分の名を呼ぶのを聞いて一層驚ろいた。彼女は優しい甥から故郷の國の事を樂しく聞く事は此上もなく幸福であつた。彼女は甥を充分にもてなす事が出來ないのを殘念がつた。其夫コンポン王は娘をナガの王妃にする爲め連れ去つて留守であつた。モンテアは甥が語るのを聞き乍らヂツと見つめてゐた。そして悲しさうにつぶやいた。

「あー、何故此上品な正直な甥がもつと早く來て呉れなかつたのであらう、必つと娘サンポアの氣に入つたであらう。娘は淋しく落膽してナガの王の許へ行つた」

サンセルキーは叔母を見た時、先づ第一に叔母を自由な身にせねばならぬと考へた。而し叔母が少しも左樣な事を考へて居らないのに驚ろき心配して叔母の心中を圖つた。

「叔母さんお間違になつてはいけません。私は單に訪問に參つたのではありません。貴方の兄、私の父コトラツクは貴方を怪物の惡者の手から連れ戻す爲め私を此處へ遣はしたのです。私は惡者の王を殺す積りで居るのです。」

全く可愛らしい甥が恐ろしく強い言葉を吐くのを聞いてモンテアは笑ひ乍ら云つた。

「私の愛する兄の子供よ、此處では言葉に注意をせねばなりません。間もなく王は歸つて來るでしよう。若しお前が王を憤らすならば私がどんな目を見なければならないか考へて下さい」

激しい熱情に目を輝かさした若者の容子を見て、モンテアは直ぐに意を覺とつた。

「私の兄が如何程私を愛してゐようとも、そんなに昔に起つた事は忘れてしまはなければなりません、私は今は幸福です。私は此處で氣樂な生活を致して居ります。」

サンセルキーは室を出乍ら

「何卒私に隨いて來て下さい、貴方を連れて行くのに邪魔立てする者があつたら場合に依つては貴方の凡ての一族を殺してしまひます。私の力を御覽下さい。」

其處で弓を取り氣合鋭ろく矢を射つた。それは恐ろしい音を立てゝ非常に遠く迄飛び、宮殿は爲めに屋鳴り震動した、矢は巨大な木に當り當つた瞬間、火を發し木葉微塵となつて飛び散つた。膝まづてゐる哀れな叔母の側に寄つて

「どうです。遁れる決心がつきましたか」と訊ねた。

叔母は云つた。

「愛する甥よ、お前が神の如く強いのを知りました。私は不幸な娘ソンポアの消息を聞かずに立去る事がどうしても出來ません。間もなく私は娘の便りを聞きませう。王が今にも歸つて來ますから王が歸つて來たら私はお前をかくまひませう。王の寢て居る間に私等は今一度よく語り合ひませう」

丁度其時、二十匹の象の激しい音でヤックの王が歸つて來たのが分つた。恐怖と困惑に蒼白になつたモンテアを前にしてサンセルキーは云つた。

「それでは私を藏まつて下さい」

◎

ネアンモンテアは愛する娘が虎の牙の前に投げ出された事件後、王をしてナガの王に嫁がせる事を誘めさせようと百方手を盡したが、王はいつも斯樣に云ふのであつた。

「ナガの王が我々と一族となる事が必要だ。此同盟に依つて吾々は安全を保證されるのだ。此結合を捨てる事は爭ひを一層大きくするだけである。今更拒絶する譯には行かぬ。」

ソンポアは大虎の皮を敷物の下に入れて出發した。ナガの王は彼女が到着した時、滿腔の喜びを述べ「私はお前の氣に入る樣に如何樣にも致さう、如何せば氣に入るであらう」と尋ねた。

「オー、ナガの王樣、若し貴方樣が皆の信ずる如く親切な方でありましたら、私が母の手許から獨り離れて來た此悲しさ苦しさをお哀み下さい。そして私等の結婚を暫くの間延ばして下さい。暫く獨りで暮させて下さい」

ナガの王は大きな庭園の中の美しい小屋をソンポアに與へた。

◎

サンセルキーを蔽まつたネアンモンテアは夫の前に走り寄り、心を痛めてゐた娘ソンポアの事情を聞いて安堵した。そして、王が疲れて深い眠りに陷入る迄語り合つた。それから竊かに若き甥を呼んで懇願した。

「王は今深く眠つた、何卒私の心を察して此處を出發して下さい」

「貴方が私に隨いて逃げるのを好まなければ、最大な不幸が貴方を襲ふかも知れません」

モンテアは、斯樣な脅かしをどうしても信ずる事が出來なかつた。夫を離れて逃げ出す樣子は皆目なかつた、そして涙乍らに甥にせがんだ。

「娘の事を考えて下さい。娘を殘して二度と會へないような事をよく考へて下さい」
サンセルキーはどうしても、叔母を脅迫しなければ動かないのを知つて云つた。
「私に從つてお越しなさい。明日私は貴方の娘が何處に居よう共必ず伴れて來ます。貴方が飽く迄拒むならば、不止得貴方の命を頂戴します。父は私が貴方と怪物の二つの頭を持歸つたのを見て、私が使命を果たした事を認めてくれませう」
其處で彼は無理に短劍を振り上げて叔母を恐れさせ、後ろに隨いて來るようにさせた。叔母は不止得後ろに隨いて來た。眞夜中に山峽の洞穴を見付けて、一先づ叔母の隱匿場所とした。叔母は其洞穴の中でヂツと、娘の來るのを待つ事になつた。サンセルキーは入口を大きな岩で閉ざして離れて行つた。彼は王が目覺めたら、必ずや直ちに追驅けて來るであらうと考へて、先づ之を片附ける爲めに引返した。そして王と其一味徒黨と出會つた時、慇懃に膝まづいて一禮して立上つた。ヤツクは相手が子供なので驚ろいた。サンセルキーはヤツクに向つて叫んだ。
「惡者共よ、自分はコトラツク王の最年少の息子サンセルキーである。ネアンモンテアは恐怖と苦痛を胸に秘めて、忠實にお前に仕へてゐたのである。只私の力こそ叔母を連れ戻し、此國から奪ひ

返す事が出來るのだ」
彼はヤツク目掛けて矢を放つた。怪物は忽ち倒れて息絶えた。矢の物凄い唸りは從者達をして額を地中に埋めしめた。從者達が恐る恐る頭をもたげた時、サンセルキーは皆の者に香木を多量に集めて來る樣に命じた。又他の者には葬ひの準備を命じた。從者達は黃金の容器を探し出して、死骸を入れ大きな火葬臺の上に安置した。サンセルキーは禮拜し矢の先きで火葬に附した。

◎

ナガの王の小館で、モンテアの娘ソンポアは別れて來た母の事のみ考へてゐた。心許なく夫と思つてゐないナガの王との結婚の爲泣いて母親と別れて來たのであつた。ソンポアは呟いた。
「ナガの王が斯樣な寛大な立派な態度をとつて呉れる以上、私の悲歎の樣を見て母の許へ返して呉れるような事は無いであらうか、此我儘は王の親切な心にのみ賴る外はない」
誠に死ぬ程の辛い惱みである。然し乍らソンポアには斯樣な立場にあつても心を靜める慰みはあつた。それはあの大虎の牙の恐ろしい遭難の恐怖を持合はせて居たからである。今床にのべてある虎の皮を見ると自分が助けられた思出が浮んでくる。

「私は恐ろしい獸から救はれた。今一度あの立派な人に救はれる事は出來ないものであらうか、私は今度も亦同じ樣に救はれる樣な氣がする」

考へはその獵師の若者へ移つて行つた。

「私は命の瀨戸際によくもあの若者が居合はせてくれたと云ふ事は、何と云ふ私の幸運であつたであらう。神樣が私を哀れみ給ふて今一度あの若者を遣はして呉れる事が出來ないのだらうか」

彼女は心に浮ぶ取留めもない空想から、神樣の使者が自分の樣な人間になり始終自分を守り續けて頂けたらどんなに嬉しい事かと考へた。そして子供らしい想像を逞ましくしてゐる中に、愛する母の國の美しい幻影を浮べ、母が『王子達の樣に其若者が王子の姿に變り自分に微笑み乍ら黃金の衣裳を纏ひ、娘にしたように自分にも膝まづいて一禮した』と物語るような夢を見た。いつも彼女の空想の終りに出て來る樂しい想像をより長く續けるためソンポアはヂツと眼を閉ぢた。

不圖異樣な物音に彼女は再び眼を開けた。目の前にナガの王が恐ろしい顏をして突立つてゐた。

「ネアンモンテアの甥、サンセルキーが間もなく此處へやつて來る。彼の言分は彼樣だ。父王コトラックの命に依り、愛する妹を連れ戻しにヤック・コンポア王の許に行つた。モンテアは母國への

途上にある。モンテアは俺に娘ソンポアを送り還して欲しいと賴んだと云ふのだ。お前は哀れな母の氣に入るようにするか、それとも一戰をやるのかと俺に挑むのだ。彼奴が此處に來る途中、ヤック族が追擊したのでコンポア王を殺してしまつた。若し俺が拒むならば同じ樣に俺を殺す積りだと云ふ。……愛する許婚者よ、お前が返事をする前に俺から申さう、若しお前を失ふようなら俺は死んでしまふであらう。俺が相手と鬪ふのを許して呉れるであらうね」

ソンポアは夢にも考へてゐなかつた。自分の運命が日夜考へてゐた夢や、空想が茲に實現する事だとは少しも知らなかつた。やつと王に申上げた。

「ナガの王樣よ、貴方樣の御親切はよく解りますけれども、私が母を大變愛してゐます事は御存じの事と思ひます。乍然私の爲めに、貴方樣に御不幸を掛けたくはありません。私は運を天に委せます。其王子は神の掟に從つて來たように、溫順しく私は掟に從ひます。王子には力があるのですから、其權力に從ひませう」

彼女が語つてゐる時、驚ろいてゐる二人の前に一臺の車が止まつた。サンセルキーに從つた神の助力者が、直ちに虎の皮を取り、車の上に擴げ、そして身振りで彼女に坐るように示し、輕く一禮して

馬に鞭打つた。サンセルキーは他の馬に跨がつた。ソンポアは後ろに振返りナガ王に濟まない顏付で別れの挨拶をした。ナガ王は悲嘆と激怒に掠奪者の車を追跡すべく家來のナガ族を召集した。

サンセルキーは神の助力者へ危害を加へずに、ナガ族の追跡を何んとか思ひ留まらす樣依賴した。依賴を受けた助力者の一人クロウスは直ちに答へた。

「ナガ族へは非常な恐怖心を捲起させたので、彼等は靜まりました」

◎

母の許へソンポアは叮重に運ばれた。ナガの王へ最後の別れの挨拶をした振返つた姿勢の儘、馭者に背を向けて運ばれた。彼女はナガの王の許へ行つた時に較べては、凡て親しみのあるものであつたが、氣懸りであつた。如何なる理由で斯樣になつたのか、又母を連れ出した未知の王子に何かと國の事情も聞きたかつた。只夢に見てゐた若者に救はれずに、違つた人に救はれたのをがつかりした。

サンセルキーは無駄口もきかず、父に命ぜられた目的達成に邁進した。心の中では絶えず森の中に殘して來た母親達の事のみを心配してゐた。

漸くにして隱匿場所の前に來た時、自から入口を開いた。母子は再會を喜び合つた。彼は叔母モンテアの足下に膝まづいて敬々しく頭を下げ、ヤツク王コンポアの死を告げ、數々の無禮を陳謝した。全く叔母に危害を加へようとしたのでなく、只恐怖心を募らせて決心を促がした迄で、實は父の命令通りお伴致す爲めに行なつた無禮であると、許しを乞ふた。若者が斯く語つてゐる內に、ソンポアはヂツと王子を見詰めてゐたが、驚ろいて喜んだ。彼女は輝ける衣裳の下に、自分を救つた野人を見出したのであつた。モンテアが言ひ出す前にソンポアは叫んだ。

「お母つさん、貴方に謝まつてゐるお方に、何卒お禮を申して下さい。私は此お方に命を助けて戴いた御恩があります。今迄チツとも氣付かなかつたのは何と云ふ私は恥知らずでしよう。此お方は勇敢な獵師で、私の足許に恐ろしい虎を倒したのでした」

同じく驚ろいたサンセルキーは、叔母が大變に憤りはせぬかと心配してゐたが、涙をたゝへて返つて自分に感謝するのを見て全く嬉しかつた。又彼が思つてゐた娘が、自分の從兄妹であるのを知り、彼女が自分をそんなに慕つてゐて呉れたのを知つてより以上に滿足をした。

◎

母子とサンセルキーが樂しく語つてゐる間、小さな獅子レアシヤシーは、六人の兄と約束の場所に殘つて居たが、突然神の助力者が早く來るようにと促がしに來たので、獅子を先驅させ、助力者の車に乘り川岸に達した。車と助力者は忽然と消え去つた。偖而母子とサンセルキーは虎の皮の上に坐り母子の不幸サンセルキーの母達の不幸話を語り合ひ、悲しみ合つた。又サンセルキーが此企ての爲如何に心を碎いたかを知つた。

◎

三人は兄の國父の國に行くには、どうしても急流を渡らねばならぬ。貝の上では鰐や惡魚の間を三人が一緒になつて渡る事が出來ない。處が幸な事にはヤツク王コンポアの兄弟であつたバンレアツクと云ふ一味が現はれた。彼は女王モンテアを知つて居り、其一行が昔の同族の家を訪づれるものと早合點して、二人を左手に抱き右手で泳ぎ乍ら向岸へ送つた。彼は驚ろく可き大事件が起つてゐるのも知らずに暇を告げて去つた。

◎

兄の王子達は川岸で途方に暮れてしまつた。數日前からの弟の不在は尙更不安を積ちして居たが、突然又獅子も姿を消してしまつたので、彼等はサンセルキーが死んだものと思つて悲しんだ。國から斯樣に遠く離れて弟の助力なしでは如何ともする事が出來ぬ。吾々は何處から立去るのか皆目分らなかつた。丁度此日、サンセルキーが叔母モンテアと娘ソンポアを伴つて彼等の前に現はれた時は心から喜んだ。六人の兄は三人に心から滿腔の謝意を示したが、サンセルキーが其大遠征の話をした時、彼の手柄や冒險が次々と語られるに連れて段々と冷淡になつた。彼等は何だか肩身が狹い思ひで默つて終つた。そして暗々裡に弟への嫉妬を感じて來た。斯樣な弟が居れば我々は誰一人王位に卽く事が出來ないであらう。彼は大膽で、勇敢で、智慧者であり、其上に超自然の天賦の才を持つてゐる。彼が益々才能を現はせば、王は彼のみを愛するであらう。又貴族も人民も、彼に心服するようになるであらう。其處で六人は秘かに語つた。彼を途中で殺してしまはう。さすれば自分等がモンテアやソンポアを連戻した光榮を得るであらう。

吾儘勝手な六人の兄は、竊かに機會の到來するのを待ち、又都合のよい機會を作る事のみ考へるようになつた。

◎

數日の後無事母國の或地方に近づいた。其地方は鋭く尖がつた岩山地帶で一行はある直立した大きな岩山の麓で留まつた。六人の兄は其頂上で王の妹の目出度い歸還を祝はうではないかと云ひ出した。女達二人には獅子に番をさせ、麓のキャンプで待つて貰ふ事にした。兄達を信頼してゐたサンセルキーは直ちに同意した。斷崖を攀登りサンセルキーが絶壁の上に出た時、六人の兄は彼を其處から突落した。アッと云ふ間もなかつた。殺害者への非難の叫びを投げる事も出來なかつた。

六人の意地悪い兄は急いで歸り、サンセルキーが谷底へ落ちたと知らせた。そして女達へは、サンセルキーは遠征への單なる助力者に過ぎないし、王は彼を放逐してから長年月を經てゐる爲、彼が生きて居る事すら知らない故に、彼の事には何にも觸れずに居る方がよい。若し我々の言ふ事に反對するのなら二人を生かしては置かぬ。又此秘密を他に洩らせば必らず復讐をするぞと申渡した。

彼等一行はそれから村々の點綴する大道を都に向つて進んだ。

一方獅子と貝は悲しみの裡に昔の假住居へ歸つて行つた。母達は彼等只二匹だけが歸つて來たのでサンセルキーに不幸があつたものと察し、獅子と貝を道案内として、幸にも息子を探出されゝばと、案じ煩らひ乍ら出掛けた。

又ネアンモンテアと其娘は、段々と王子達の話によつて、確かに若き王子の犯人である事を知つたが恐ろしいのと確たる證據を握つて居らぬので、悲歎を押隱して仕方なく隨いて行つた。

偖而、都に到着してから彼女達が、王から此上もない手厚い歡待を受けるのは何と云ふ苦し味であつたであらう。又王が、王子達へ心から彼女達を救ひ出した功勞に感謝するのを見た時、王へ一切を語り度い氣持で一杯であつたであらう。然し、間もなく六人の王子の、意地悪な母達は、息子達の演じた悲劇を知つたので、彼等母子に氣に入る爲又警戒する爲、常に母子の側を離れなかつた。

コトラツク王が、愛する妹を再び見た非常な滿足の樣子を見て、六人の母達は已れ等の便益、打算から、ソンポア王女を、六人の王子の中で氣に入る誰れかと結婚せしめる事を願出で、王から妹モンテアへ其願出の傳達を求めた。

モンテアと娘は斯樣な極惡非道な振舞、恥辱を其儘見て居る事は出來なかつた。モンテアは六人の母達の考へを王から聞いて兄に答へた。

「私の子供ソンポアは喜んで貴方の息子の一人と結婚致させませう。乍然息子の王子達の中で娘の床に敷かれてある虎の皮に就いて說明が出來ますなれば」

此變つた提題を知つた時其動揺は大きかつた。求婚者仲間で作られた堂々たる回答も効果なく遂に問題を判斷する事を誇めた。又愛されるやう手を盡した凡ゆる努力も無益であつた。六人の母達は子供等の惡企みを、王が知つてはおらぬか、或は何時か知れるのではないかと懸念した。其處で王とモンテアやソンポアと不和にならしめやうと企てた。

「王様よ、あの母子二人が非常に悲しんでゐるのをお氣付きになりませんか、二人限りの折には涙を流じて悲しんでおります。吃度二人はナガ王やヤツク王を追慕して居るのでしよう」と告口した。

コトラツク王は屢々二人が歎いてゐるのを見て居た。彼は竊かに見張りをさせた。或日竊かに二人が歎いてゐるのを確めるや、王は二人の言ふ事も聞かず宮殿から連れ出させて終つた。丁度昔六人の母によつて二人の母が放逐された時の様に。

六人の兄弟は斯くて秘密の發れる心配が無くなつたので一層大膽になつた。そして王に對して王國を六人に分割して呉れる様に催促をした。王は驚ろきと吾儘息子に心を痛め乍ら、未だ若く經驗も少ないから人民を滿足させ得ぬであらうから、憩く時節を待たねばならぬと云ひ聞かせた。

王は息子の事で心を惱まされてゐたので、氣晴し旁々狩獵に出掛けられた、立派な馬に跨がり森の奥深く獲物を探がすより、思索に耽りつゝ何等の警戒もなく其從者達と離れて行つた。

王は、嘗ては王位を狙ふ六人の息子の母達のために煽動されて二人の妻を捨てたが。今又妹とソンポアを追出した。其慘忍な己れの命令に就いて思索に耽つた。彼は己れの周圍の者達の陰謀に、易々と欺まされてゐるのではないだらうかと自問自答した。彼は急に氣がついた。そして自分の行爲を後悔した。彼は狩獵を打捨てゝ妹を探出し宮殿へ、連れ戻さうと決心した。王は諸々方々を探し廻つた。突然王は可哀相な妹とソンポアを林の中の空地に見付け出した。丁度虎の皮の上に坐り、悲しみ乍ら食事の準備をして居たので、走り寄つて涙を流して輕卒な無情な振舞を後悔し、そして許しを求めた。そして二人の日頃の悲しみ、苦しみの事情を語るよう願つた。

◎

王は始めて息子達の罪惡を知り、又二人の母が子供と共に長年月詑住居をしてゐるのを知つた。サンセルキーこそ、立派に自分を助けて呉れるであらう。そして、生れて讒誣され、斯く罰せられた息子、いとしきサンセルキーの死を心から悲しんだ。

王はどうかして不幸な母達の假住居へ案内もなく出掛ける事が出來ぬかと考へた。見付け出す迄は

此儘宮殿に歸らぬ事を決意した。

從者達は間もなく王の跡をつけて追ひ付いた。直ぐ樣飛脚は六人の息子と母達を逮捕する命令を持つて出發した。次いで王は直ちに他の一隊を宮殿とは反對の方向へ、荒れ果てた寺院を捜索すべく手分けを命じた。從者達やモンテア、ソンポアは王を勵まし乍ら側を離れずに、大森林の最も繁つた木立の中を進んだ。

或日疲れた彼等一行は、行者の草菴の近くに流れる小川の畔に休んだ。王は從者達に吾々が探してゐる寺院の件を老行者に訊ねにやつた。老行者の答は「西の方向へ行きなさい。さすれば寺院へ着かれるでしよう」

◎

獅子と貝に導かれた二人の母達は、岩の多い地帶を探し廻つたが何等の手懸りもないので、最早死んだものと諦らめ、母達は涙乍らに假住居に歸る事にした。歸る途中で突然獅子が、二人を導く如く後ろを振り返り乍ら矢の如く走つて行つた。誰れかゝ自分等の家を訪ねて來てゐるものと察し、一層心をひかれて歩みを早めた。貝が土の上に引いて曳れた銀の筋に從つて急ぎ歸つた。

何と云ふ大きな絶望が一瞬、彼女達の喜びに變つた事であらう。獅子がサンセルキーと共に現はれて彼女達を待つて居たのであつた。いつ迄も息子を呆然と見つめてゐた。サンセルキーは母達に其後の旅と自分が犧牲になつた陰謀に至る迄、詳ぶさに物語つた。

「私が恩知らずの兄達に謀られて突落された時、其恐ろしい谷底で、神が神の手に委ねられた土地で、かゝる罪惡を犯す事に激昂し、私を救ひに來たのです。神は私を手で受留めて曳れた。それから私の不思議な弓を拾つてくれ、貴方達を安心さす爲め此處迄連れ戻つて曳れたのです」

サンセルキーは考へた。

「自分の兄達は永遠に私の父に、私の事を知らさぬ樣に注意するであらう。私は只叔母とその愛する娘にしか期待し得ない、然しあの惡人達に向つて二人は何を成し得ようか、萬事は唯神の意によるのみである」

◎

老行者の忠告に依つてコトラック王は、西に向つて眞向に進んだ。直ぐに彼等は假住居を見出した。少し離れた處へ從者達を留め、モンテアとソンポアと共に近づいた。王の驚ろきはどんなもので

あつたであらう。彼は死んだと思つて居た王子サンセルキーが追放された二人の母の手を引き乍ら現はれるのを見たのだ。三人は膝まづいて王に一禮した。當惑と悔悟に心を一杯にして、王は叮重に三人を斯樣に長く追放してゐたのを詫び、今後は決して斯樣な憂目を見せぬと誓つた。モンテアはサンセルキーが如何にして王の命令と遠征を果たしたかを物語つた。王は息子自身からも詳細に話をしてくれるようにねだつた。王は幸福であつた。凡ての者も幸福であつた。王は妹モンテアの心からの喜びと娘ソンボアの喜びの眼の輝き燦めくのを見て皆に語つた。

「聞きなさい。私の六人の意地惡い息子達は、母親達と共に罰せらるであらう。實は其母親達は私の手で六人の息子の一人とソンボアを結婚せしむる樣に申出たのだ。然し私の妹が私に云つた返事には『私の子ソンボアが床に敷いて今使つてゐる此皮の主、虎の死んだ話の出來るものゝ妻になる事に喜んで應ずる』と、此質問に應ずる答者は誰も無かつた。私はソンボアの感謝と喜悅の眼つきと、サンセルキーの當惑氣な感謝の眼つきで謎が今始めて明らかとなつた。私の唯一の後繼者である可愛い息子よ、我々に其話をして呉れぬか、そして我々は出來るだけ早く妹の美しい娘と吾息子の結婚式を命ずる爲めに出發しよう」

忽ちの裡に國の隅々迄、此の快よきニュースが非常な滿足を以て速かに傳はつた。都の人々は勿論遠い地方の者迄、王や其人々に拜禮しに又王より手厚き歡待を受くる爲王宮に集まつた。王は貴族達を集めて六人の兄達と其母親達の不行跡を告示した。彼等は罰せられ遠い處へ追放せられた。彼等を伴なつて行つた護送者が歸つて來ての報告は

「追放者達は、何時か許しを乞ひ願ふ事も考へず、失なつた財寶の事のみを悔んでゐた。彼等は王とサンセルキーの惡口ばかりを云つてゐた。そして彼等の唯一つの考へは復讐であつた。彼等が惡體をついてゐる時に、吾々は引返したが、其瞬間大地が大きく割れて彼等は一擧に捲込まれてしまつた」と。

◎

翌年ソンボアは男子を生んだ。非常に美しい子供であつた。若し子供時代の憶出を持つてゐる父が注意せなければ卽ち「成人の曉、王となる爲めには自分同樣に勇敢になる樣試練をせねばならぬ」と云はなければ人々は終日彼に追從し俟愛した事であつたであらう。

ソンボアは續々と息子や娘を生んだ。其子供等には人々は追從を許されなかつた。必要以外の事は

知らされず、彼等悉く生命を恐れず勇敢に馳せ廻るに適する樣に育てられた。

長年の後コトラツク王は、佛門に入つた。荒れ果てた森の假住居の傍に立派な寺院を建立せしめ、サンセルキーを王位に卽け、信仰三昧に人生を終るため其寺院に入つた。ソンポアは女王となり、長男は成人して、大弓を手に彼等の後繼者として側に侍した。

サンセルキーは己れに助力した神々の靈に立派な祭壇を設けた。彼は神々に依り生命を救はれ、名譽を與へられた恩を感謝した。毎年彼は其場所にて彼の思出の禮拜に必らず參拜した。

彼はモンテアとソンポアと共にヤツクの王が絕命した場所に大きな廟を建てた。今日も尙其廟は殘つてゐる。

小さな獅子と貝は間もなく死んだ。同じ黃金の遺骨壺に其灰が收められた。（終）

七、ボルボンとソウリボン

（一）

クレアサンスと云ふ國に、昔ソウリヨと呼ばるゝ王樣があつた。后はチェアと呼ばれ天使に較べられる程美しい方であつた。或夜不思議な夢を見た、天人が水晶の玉を持ち光を放つて傍らに下りて來て告げた。

「比類なき女王よ、此寶玉を受けられよ、此寶玉を手にする時は空を驅ける事が出來る。誠に王國より貴き品である。貴方は大切に之を保管致しなさい。若し今一つ欲するならば貴方の望みを聞きとゞけてあげよう」

直ちに天人は二つ目の玉を女王の手に戴せ、空高く舞ひ上り乍ら附け加へた。

「之れは更に一層貴き品である」

チェアは此二つの玉を貰つて喜んだ。そして頭の上に並べた。

目覺めた女王は、王に其儘夢物語を打明けた。王は非常に喜んで、これは吃度子供を二人持つ事だ

紙表の本原

然かも素晴らしい比類無き立派な王子が生れるのだと語り合つた。

其後間もなく女王は懐胎した。そして手厚い配慮の後、十ヶ月目に最初の子供を生んだ。翌年同じく、十ヶ月の後に第二の子供が生れた。其顔立は、豫言者達が早や既に將來賢明な聖僧以上の相であると見てとつた。王子達が成長して王は兄をソウリボン、弟にはボルボンと云ふ名をつけた。王は此上もなく愛したし、首長や人民達は皆長敬した。

王にはネアン・モンテアと呼ぶ第二の后があつた。此第二の女王も十ヶ月後に、王子ベイボンサを生んだ。王は先きの王子等と同樣に愛した。ベイボンサは斯くして五歳となつた。母親のネアン・モンテアは性質はよくなかつた。我子可愛さの餘り、將來王位を繼ぐ二人の王子の事を考へると堪えられなかつた。假りに爭でも起きた場合には、二人は助け合ふであらう。一人が戰つてゐる時は他の一人は要塞を築くであらう。自分の子供は如何にしても二人に對抗する事は出來ない。

意地惡いモンテアは絶えずサウリボンとボルボンを罪に陷入れる事のみ考へた。或日二人の兄弟が宮殿の中を歩いてゐた。その時兄は七歳、弟は六歳であつた。二人はモンテアの前を過ぎた。モンテアは突差に此機會に二人を無いものにしてやらうと考へて呼んだ。

「此處へいらつしやい、よくお見得になつた。抱いてあげませう。早くお出でなさい」

第二の女王の優しい言葉に二人は恭々しく近かづいた。モンテアは二人を抱きかゝへ愛撫しつゝ、突然二人を膝の間に押しつけて、大聲をあげて救ひを求めた。

「此二人は私に突つかゝつて來ます。私を助けて下さい。おー王様、どうして私を子供に迄、斯様に憎まさすのですか、こんな不幸な目にどうしてさせるのですか、何故子供達へ私の上に乘りかゝつて亂暴させるような事をさせるんですか、若し私がお嫌ひなら直ぐにも私を追ひ出して下さい」

彼女の叫び聲は宮殿の隅々迄響いた。王は玉座を下りて現場に馳せつけた。そして二人の子供とモンテアの有様を見て、怒りに震えて王は叫んだ。

「子供のくせに斯様な憎む可き振舞を仕出かすのか、恐ろしき者共である。之れでは大きくなつたら必らず、俺にも反抗するであらう。生かして置く譯に行かぬ」

王は怒りに委せて吾子である事も忘れ、死刑執行人を呼び子供等を鎖で縛り遠くへ連れ去つて、首を斬つて埋めてしまへと命じた。執行人は、王の命令に依り不止得二人を捕へに近寄つた。兄弟はモンテアが、二人に罪を被ぶせた恐ろしい企てをどれ程情なく思つた事であらう。二人は泣いて母を呼んだ。

「お母つさん、助けに來て下さい。私達は何も惡い事をしたのではありません。どうして王様は私等を罰するのでしよう。どうか助けて下さる様王様に願つて下さい。お母つさん!!」

執行人は躊躇した。然し、王の命令には如何んとも致し難く、二人に鎖をかけ遠くの森へ連れて行つた。母は子供達の叫び聲を聞いて氣を失なつてしまつた。間もなく氣がついて連れ去られた森へ跡を追つた。やがて近づいたが、精根も盡き果てゝ倒れてしまつた。漸くの事で子供に追ひついて涙乍らに二人を抱き締めた。

「おー、我が子よ、お前達は鎖に縛ばられてゐる。あー、私は死ぬ程苦しい。お前達は生れた時から朝な夕な私はお前達の側を離れた事がなかつた。今お前達は殺されて埋められようとしてゐる。お前達が叫んだ時、母は直ぐにお前達の處へ走つて行つた。あー、私の胸は張り裂ける様である。お前達が殺されるのなら、私はどうして此世に留まつてゐられよう。私も跡を追つて死んでしまひます。私の子供は王様の息子である。それをむざ〳〵殺してしまふとは!!」

母は泣き悲しんだ。

「斯様な事なら、何故お腹にある間に死なゝかつたのか、あー、私は生き殘れない。私も死んで終ふ」

母は胸が黑くなる程叩いて泣き悲しんだ。そして聲も細まり、根も盡き果てゝばつたり倒れた、そして息絶えた。二人の子供はシクシク泣き初めた。ソウリボンは嗚咽した。

「おー、お母つさん、親切なお母つさん。斯様な處迄探がしに來て下されたのに會つたと思つたら何故死んでしまはれるのですか、あー私達はどうして善いのやら、此處迄私達を育てゝ來て下された母上、若しお母つさんが生き返らないのなら私達もお側で死にます。

おー弟よ、お母つさんが生き返られるよう神様にお祈り致しませう。おー神様、父に忠實な我々二人がお願ひ申します。何卒母を甦返らせて下さい。

小さなボルボンは泣き乍ら母を兩手で抱きつゝ繰返し慟哭した。

「おー愛する母様、私等の爲めに此處迄來て下された、今度の不幸も母様御自身の不幸と苦しんで下さつた、母様の御親切は海や山よりも大きいのです。今私等は此淋しい森の中でお跡を追ひます。私等は最後のお祈りを神様に致します。谷や峽間。山々に住む神様、私の云ふ事を聞いて下さい。最後の願ひを聞いて下さい。私達は母様に忠實でありました。私達を生んで下さつた母様を哀れんで下さい。何卒母様を助けて下さい。元の様に甦せて下さい」

◎

神様の惠みに依つて母は間もなく甦み返つた。母は子供達の喜ぶ聲が聞えて來た。直ぐに二人の愛する子供を抱き寄せて

「おー、お前達、私は倒れて意識を失なつて居たのであらうか」

二人は口を揃へて云つた

「氣絶したのではありません。死なれたのです。私達が神様に甦返るようにお願致しました。私達を抱いて下さるのも神様のお蔭です」

母は二人の話を聞き乍ら嘆いた。

「それにしても、今此處でお前達との別れに苦しむより死んで居た方が善かつた。私はお前達なしでは生きてはおられない」

執行人は眼前で女王が死に、小さな王子達の祈りを聞いた。そして神様が祈りを聞き屆けたのを現

實に見たのであつた。驚ろいた執行人は茫然と凝視した。そして最早命をとるのを望まなかつた。執行人は膝まづいて一禮した。

「女王様、我々は立派なお子達の力を知りました。我々は二人の生命をとる事を命ぜられましたが其命令を實行する事は出來ません。王子達をお逃がせ申します。我々は二人を首斬り死體を灰にしたと報告致しませう。我々を御心配なき様確かに秘密を守ります。乍然何卒早く此處を逃げて下さい。他國へ逃がして下さい」

一部始終を聞いた女王は全く嬉し涙に暮れた。

「おー、執行人よ、子供達は死なゝくてもよろしいのですか。あー、お前方は救ひの主です。これに越した善い行ひはありません。難破船の人々が岸に辿り着いたようなものです。私が生きてゐる限り、充分に償ひませう。私は立派な賜物を致します、貴方達の望みを叶へてあげませう」

嬉しさに夢中となり些の心配もせず、女王は直ちに宮殿に歸り二つの二重袋に糧食を一杯につめ、多くのダイヤを欽めた素晴らしい指環を持つて、子供達の處へ引返し、手渡し乍ら云つた。

「子供達よ、私は此二つの指環しか財産とては持合せはない。此れを上げます。此飾りのダイヤは立派なものです。若し道の途中で暗くなつた時、灯がなければ之れを用ひなさい。輝きは灯の役を果します。又小枝や枯葉を集めなさい。それにダイヤを觸れれば燃え上るでしよう、枝の上に食物を並べて料理して喰べなさい。又森や谷を通る場合には充分に野獸に注意なさい。お前達は之れからは運に委せて旅立つのです。神様は必らずお救ひ下さるでしよう。今から十年の後には大きくなつて歸つて來るものと母は信じて待つて居ります。歸つて來なければ死んだものと思つて私も死にませう」

母は二人の子供を抱き締めた。二人は泣く泣く最後の別れを告げて旅立つた。母は山や森や泉の神々に子供達を見守つて下さる様お祈りをした。

偖而、死刑執行人は王に報告した

「仰せに從つて二人の王子を殺し、死體を燒いて參りました」

報告を聞いて王は滿足した。

「燒く必要は無かつた。森の中へ埋めるだけでよかつた。全く天罰と云ふものだ、誰れも非難する事は出來ないであらう」

王はチェアが嘆くのを止めないので、憤つて罵つた。

「お前の子供等は、わしを侮辱したのだ、當然の處置ではないか。何故左樣に悲しむのだ、氣に入らぬのなら此處に留まらずに出て行け、さもなければ護衛に命じてお前を連れ出させるぞ」

チェアは恐れ戰ひて一言も發する事が出來なかつた。チェアが宮殿を後にしたが、誰もその不幸を哀れみ乍らも、救はうとするものが無かつた。

其後王は、チェアの噂を知らうともせず又、チェアも王に便りを送らなかつた。

(二)

若い二王子は手を携えて當てもなく遠い地方へ旅立つた、悲しさと淋しさに二人は森の中を歩き乍らも、自分等の不幸を忘れ只母の事のみ案じてゐた。やがてバスキムと云ふ大きな國へ着いた。其國王はキエタ・メアノツクと呼ばれてゐた。二人は神の恩惠に依り唯一日にして六十里以上の道程を歩いたのであつた。丁度其時大きな市が開けてゐて、人々の間に高價な品物が賣買されてゐた。二人の子供を見た人々は心から讃歎して囁き合つた。

「何と二人は綺麗な子供であらう」

女商人の仲間でも談じ合つた。

「二人は瓜二つだ。そして溫順なしい子供である。若し私に呉れるなら喜んで育てるのに」

或女は訊ねた

「何處から來たの、二人限りで歩いて來た可哀想な子供達、お前達は母と離れて迷つてゐるのか、理由を話して御覽なさい。何とか世話しませう。……どうして話をしないのか、おかしい子供だ、只默まつて市に隨いて歩いてゐるのかね」

女達は二人を優しく勞はり乍ら抱き上げたり、菓子を與へたり又飾帶を掛けたりした。二人はバスキムの人々の親切に涙を流して感謝し、喜んで歩み乍ら囁き合つた。

「私等は嘆くまい。只母の事のみを考へよう、母は嘆き悲しみ苦しんでゐられようから」

此國を過ぎて二人は大きな森の中へ入つて行つた。其處には池があり、泉があり、綺麗な流れが横切つて居り流れも森も眠つてゐるように靜かであつた。其處を通り拔けると山路に差しかゝつた。山には凡ゆる動物が草を喰べてゐた。爽やかな綠の美しい平野に圍まれてゐた。

早や道も行きつまつた樣であるので二人は疲れを休める爲大きな無花果の木の下に坐つて憩つた。

華やかな幸福に滿ちた宮殿に生立つた二人の今の哀れな姿、母に別れて遠い未知の國に漂泊する二人、噫二人は前世に犯した報いに依り、今は苦しみを味はつて居るのであらうか。

山を眺めた靜寂の裡に光を鈍らせた太陽が、今高い峰の彼方に隱れようとしてゐる。其最後の光を花咲く草や木の上に投げかけてゐる美しい景色を靜かに眺めてゐた。

二人は眠るために梢に攀ぢ登り、しつかと抱き合つた。然し眠られなかつた。こみあげて來る悲しさに二人は語り合つた。

「二人は何と不幸なのであらう。我々程の不運は世に又とあるだらうか、二人は生きるのがよいのか、死ぬのがよいのか。乍然別れる時母は申された『子供達よ左樣なら、乍然十年經てば歸つて來い。歸らぬ時は私は死ぬでしよう。今からお前達は當てもなく森の中を流浪する事でしよう。毎夜命を狙ふ野獸の居る淋しい處を通るでしよう。再び會へるかどうかを思ふと私は堪えられない。けれども神樣は吃度二人を見守つて下されるでしよう』と」

夜の鳥の叫び、野獸の咆吼が聞こへた。二人は眞夜中になつてやつと眠れた。

◎

神の惠みに依つて二人に惹起つた事件は天に通じた。全智全能の神々は聖なる寺院が不意に大火災を起し其熱氣に堪えられぬ樣な衝動にかられた。之れは只事でない。何事か起つたのを知つた神々は地上を見透かし視線を彼方此方と走らせた。そして抱き合つて梢に眠る二人の姿を見つけた。神々は此世へ二人が生れ出た原因をよく知つてゐた。人間達の控帳を繙いて二人が佛陀の出であり、二人は佛陀の化身であるのを知つた。神々は如何にもして助けあげ幸運を與へてやらねばならぬと思つた。

神プラヱンは神の使プラ・プスノカを呼んだ。

「汝地上に下り、二人の子供が運命に從つて生ひ立ち、二人が最善をなし得るよう助力せよ」

命を受けたプラ・プスノカは喜こんで一禮し、直ちに空間を馳せ下り森の近くに來た。そして眠る二人の子供を見た。プスノカは二羽の雄鷄に形を變へた。黑い一羽は木の下で騷がしく鳴き、白き一羽は山の上の木に止まり、大聲で鬨を作つた。挑み好きな黑い鷄は白い鷄に向つて云つた。

「相手よ、高い處の木に留まつたものだな私は並大抵ぢや左樣な高くへ登れない」

次いで更に挑みかゝつて云つた。

「お前の親達は私の國の棲家を爭ふようにお前を惡く育てたものだ、私の肉を喰べた者は七年後に

は二つの王國の主となると云ふ事を知らぬのか、お前の鳴聲と羽搏きは私を侮辱するものだ。どうだ力と勇氣を示めして下りて來い」

白い鷄は云ひ返した。

「木の下に止まつてゐるお前は必らず下等な生れに違ひない。私はね、賢こくて力が強いので山の上に住んでゐるのだ。何れが偉いか較べて考へて見よ。私の肉を喰べたものは七ケ月後に二つの王國を治める事が出來るのだ。お前は闘い度いのに違ひない。私に反抗して見よ」

ブラ・ブスノカは斯樣に姿を變へて神が二人に助力をしてゐるのを知らしめないで置かうと思つた。物音に目覺め鷄が相闘はんとするのを見てボルボンは兄と語り合つた。

『何れが勝つでしようか、白い方でも黑い方でも好きな方を撰びなさい。何れが勝つか見て居ませう』

「私は弟です。黑が年下と思はれますから私は黑を撰びませう」

「何れでもよろしい、貴方の好きな方をお取り」

此時白い鷄は頂上から飛び下り激しい闘爭が始まつた。夜明けには二羽共倒れて終つた。二人は始めから見て居たが、二羽共倒れたのを見て急いで梢から飛び下り、ボルボンは黑、ソウリボンは白の鷄を摑んだ。そして毛を毟り料理して飢えを療やし殘りは互に保存して、又果てなき旅に出發した何時も心の中では母の事のみ案じ煩らひ乍ら誰れにも會はず斯くて七ケ月は過ぎ去つた。

或夜コントボレーの王國に辿り着き、旅行者の爲めに設けられた休息所の前に來た。其處は靜かであつたので二人は横になり眠つた。

此國はビソー王が治めて居た。無數の軍隊を持ち全國民や首長から愛敬され晩年に至る迄よく王國を治めてゐた。王は七ケ月前、女王コモル・メレアと美しくて德あり、貴族達や全人民から親まれて居る一人娘を殘して崩御された。自然に備はる魅力あり又優雅の持主であるサー・ボフア王女は稀に見る才能を持つて居た。王女は常に書物を愛し、最も複雜なそして哲學的な趣味に耽るのを好んでゐた。貴族も僧侶も學者達も喜んで、王女が語るのを聞く事を樂しんだ。王女は皆の者へ才氣ある謎を課し、鮮やかな解答を與へ驚ろく可き聰明さの前に敬を表はさゞるを得なくせしむる事が屢々あつた。乍然王位繼承者の撰擇問題に就いては國の方針に付いての意見は區々であつた。人民達の安からざる憂ひを考へて、當局者は占星術者に結論させる事になり術者は女王へ回答を齎たらした。

「女王よ、人民を善導するに足る光榮ある王位に卽く人は此國に居ります。何卒聖象に裝を飾り、象の意の儘に歩かせて下さい。象は神より王位を授けらるゝ者がゐる定められたる場所へ眞直ぐに歩るいて行くでしよう。そして其者の前に跪づいて拜禮し、敬々しく持上げ羽根蒲團に乘せて都へ連れ參るでしよう」

占星者が言上するや女王は直ちに命令を下した。象は其使命を喜ぶ如く猛々しく吼え、北に向つて進んだ。

森の中の淋しい休息所で二人は長途の旅の疲れと續いた不自由の苦しさで深い眠に陷入つてゐた。二人は突然、王象が長い行列を續けて堂々と來たのにも目覺めなかつた。賢しこい象は頭を下げ膝をついて二人の眠つてゐる高さ迄身を屈がめ、器用な鼻で靜かに兄ソウリボンの體を卷き眠りを妨げず頭の上に持ち上げ、占星者が告げた通り背の蒲團に乘せて急いで宮殿に歸つた。歸途についた行列の物音に目覺めて自分の傍に兄が見えず休息所の近くに首長や兵士隊の群れを認めた時、ボルボンの驚ろきや恐怖はどれ程であつたであらう。彼は森の奥深く逃げ風の齎らす僅かの物音にも慄ひ戰いて木の洞穴の内に隱れた。

象に伴はれたソウリボンは、宮殿の中で御機嫌をとつてゐる從者達に圍まれて始めて目覺めた。始めは自分と共に連れられて來たと思つた弟の姿が見えないので涙を流し心配して訊ねた。

「皆樣、私の愛する弟は何處に居るのですか、私の側に眠つて居たのです。どうして私と共に連れて來なかつたのです。何卒弟を返して下さい。お願ひ致します」

從者達は平伏した。

「我々は貴方樣が立派な弟樣と御一緒だとは存じませんでした。歸つて來た象は貴方樣だけを連れ戻つたのです」

從者達は餘りの落膽の樣を見て、ボルボンを探す爲彼の前を退いた。やがて從者達が歸つて來た時、斯く告ぐるより致方なかつた。

「貴方樣をお連れ申した小屋を探がしましたが、見付ける事は出來ませんでした」

それを聞いてソウリボンは全く絶望した。漸く氣を取直した時、王の習慣に從つて、未だ子供であるソウリボンに兵士達や召使の者共が次々に紹介されるのを見て訊ねた。

「何故私を捕へたのですか、私を如何しようとなさるのですか」

貴族達は答へた。

「我々は今貴方様が賢しこい隱者達により探し求められてゐた一家から分れた二人の王子である事を知りました。此國の王は崩御遊ばされました。我々長老は、此國の王に適する人を求めました。幸運にも貴方が我々の所へお越しになつたのです。我々は此宮殿の主として貴方様を尊敬致し度いのです。先王の唯一の娘美しきサー・ボフアが貴方様の后となるでしよう」

彼の前に平伏するコントポレー王國の貴族達の申込を拒絶する事は出來なかつた。ソウリボンは止むなく承諾した。

メレア女王は神に依り與へられた王子が到着したのを聞いて、直ちにサーボフア王女との即位式の準備を命じた。盛大なる即位式に於けるソウリボンの話は扨て措いてボルボンの話から始めやう。

太陽が大きな木を茜色に染め西山に將に沈まんとする時、ボルボンは洞穴の内で兄の見えなくなつた事に悲しみ嘆いた。

「多分兄は死んだのかも知れない。之れからは全く獨りボツチである。行末私は獨りで堪えられないであらう、兄が居なければ父の國へも歸る事は出來ない。愛としい母親から別れて二人限りとなり此處迄耐えて來た。あゝ、二人は何時迄も離れる事は出來ない。誰れが私に助力して兄の行方を探して呉れるであらうか」

ソウリボンを探がし求めつゝ始めの休息所迄歸つて來た。そして大地に伏して慟哭した。木も芝草もない乾き切つた土の上を振返りつゝ二人で野獸の棲まつてゐる森を通り過ぎた長い月日を思出で乍ら段々と遠ざかつて行つた。

町の入口に辿り着いて兄が自分同樣探がし苦しんでゐるかも知れぬと思ひ番人の所へ訊ねに行つた。

「番人樣、此處に見張つてゐらるゝ貴方は私の兄が町に入るのを見掛けませんでしたか」

傲慢な番人達は訊ねらるのを煩さがつて冷淡に云つた。

「王の番兵に向つてつまらぬ事を訊ねるお前は何處から來たのか、假りに兄が通つたとしても、誰も曾て見た事もない兄をどうして兄だと認める事が出來るか、此夜中に眠りを亂しに來た毒蟲、氣をつけろ」

意地惡な惡口と恐ろしい態度に小さなボルボンは怖れて城壁を離れ、運に委せて道をトボトボと歩

いて行つた。度々神様に野獸から救つて下さいと祈り乍ら七日の後、彼はボールボレーの王國に來た。都は城壁に取圍まれ金や綠や赤色に彩られ燦然と輝いてゐる宮殿にはトルニツト王が住まつてゐた。愛する后クラモー女王は娘一人殘して死去した。娘ネアンケセイは大變優さしい王女で全く天使のように美しかつた　年が若いのにも拘らず賢明で彼女は羨ましい程な財寶と豪奢な孤獨の裡に父に育てられ、撰ばれた宮廷の女官に侍しづかれて暮してゐた。

宮殿の近くにゐる一人の老婆が樣々な花卉を栽培し、王女の許へ朝な夕な花束を持つて來た。夜となつて雷鳴が轟き眞黑な空から突然驟雨が沛然と降つた。ボルボンは電光の閃きの下で逃げ場を探がした。そして老婆の小屋を見付けて走り寄り戸口の前に立つて呼んだ。

「親切な方よ、雨が降つてゐる間何卒入らせて戴けませんか」

老婆は訊ねた。

「斯樣な夜中にお前さんは何處から來なさつたのかね」

「遠い國から來ました。途中兄から離れ此驟雨に出會つて寒さに震えてゐます何卒御同情下さい」

「私は貧乏な花賣婆です。花を賣つてやつと暮してゐるものです、貴方が入つても居る處もありませ

ん。然し寒くて困まつてゐるのならお入りなさい」

哀れなボルボンは這ふ樣にして入口の階段を上つた。そして震え乍ら家の隅に坐つた。

「貴方樣の殘りの糧でもありましたら施して戴けませんか」

「お前さんはどうして左樣に圖々しいのです。私は親切に雨宿りをさせた。未だ其上にお前さんに糧を振舞はねばならぬのか」

「優しい伯母ん、私は方々の國を七ケ月もさまよい、長い間木の實を喰べて不自由を忍んで參りました。お腹が空いて堪りませんので御無理を申しました、何卒お助け下さい」

「そんなだつたら仕切りの傍らにある鍋の中に、私の食事の殘りがあります」

ボルボンはお禮を云つて立上り臺所の仕切りの處へ行つた。暗くて分らないので燈火を求めた。再び眠りを妨げられた老婆は一層冷淡に云つた。

「お前さんは松明が要ると云ふが、私は持合せがない。厚ましいね、私は雨宿りをさせ食事を施した。もう眠りを邪魔せないでお呉れ」

ボルボンは指環を思ひ出した。指環には高價な寶石が 嵌めてあつた。「光がない時に指にはめると

輝きます。又料理も出來ます」と母は云つた。彼が指にはめた時明るい光が石から發した。老婆は自分の松明が燃されたものと思ひ、怒り心頭に發して叱かつた。

「私が大切に使つてゐる松明の殘りを勝手に燃やすとは怪しからん」

棒を握つて臺所へ飛んで來た。

「懲らしめの爲頭を毆つてやらう」

處がボルボンの指環から燦然と光が輝いてゐるのを見て老婆は當惑した。そして適切り王子を泥棒と思ひ込んだ。老婆は急いで宮殿に走り王の前に出た。

「王樣、私の家に泥棒が逃げて來て居ります。王樣の寶物にしか無い筈と思ひます素晴しい指環を欽めて居ります」

王は老婆の訴へを聞いて命じた

「此女に隨いて行き盜賊を捉へよ。それに首枷を欽め足に鎖を結び逃げぬようにせよ」

衞兵達は小屋の前に來た。老婆は聲を落して耳に囁いた。

「泥棒は此中に居ります。注意なさい早く捉へて王樣の前へ連れて行つて下さい」

素早く取押へられ縛ばられた貧しい子供は、震へ乍ら涙の裡に神の加護を祈つた。一言の辯解も言はさずに連れ去つた。王は訊問も裁判もせず牢屋に閉ぢ込めた。首枷と足に鎖を縛りつけて食事を攝らせる事を禁じた。不幸な憂目を見たボルボンは段々と死が近づいて來るのを知つた。其時母の優しい憶出が心に滿ち溢れ、母への報恩を思ひ浮べた。すると優さしい母の姿が目の前に現はれ、勇氣をつけ慘酷な運命に堪へる力を與へた。彼は非常な苦難に堪え六年間何も施しを受けず生きてゐた。

占星者達は、若い子供が斯く苦難に長らく堪えて居るのは如何した譯かと色々と原因を調べた。彼等の一人は、彼の苦難は過去の罪の償ひであると述べた。

前生に於て彼は貪慾な獵師であつて、山野にて多くの鳥獸を殺したのである。或日彼は暴風に襲はれて荒れた草菴に遁がれた。電光の閃きに怖れた一對の鹿が同時に草菴に逃げ込んだ。彼は喜んで牡鹿の毛深い角を捉へ牝鹿を傍へ引留めやうとした。然し牝鹿は逃げ出したので牡鹿だけ檻の中へ縛つて置いた。此罪を罪人は今償なつて居るのである。

彼は枯葉のように痩せ衰へて食物を奪はれ乍らどうして死なゝいのであらうか、それは彼はプラ・プスノカが變形した黑い鷄の肉を喰べたからである。一萬年經つても死なぬであらう」

立派な生立ちの者として、斯かる苦難に堪へ得た能力、特に日頃母への感謝の心構えは神の認める所となつた。全智全能の神々は直ちに善行を地上に行なはねばならぬと考へた。神々は佛陀の化身である子供が、牢獄に閉ぢ込められてゐるのを知り、今受難の苦しみはやがて終結し、自由の立場に代はるに相違ない事を確めた。そうだ優さしいケセイが極近くに夫たる可き者が居るのを知らない。彼女に知らせてやり、可愛い子供の苦しみを救つてやらう。

眞夜中に神は天空を翔り、王女の眠る宮殿に着いた。夢の中に王女は神の姿を見た。そして詳さに聞いた。

「貴方の伴侶である佛陀の化身の王子が、今貴方の側近くで苦しんでゐる。優さしいケセイよ、此以上王子を不幸にさせてはいかぬ」

ケセイは目覺めて床の上に坐はり今の夢を思出した。

「神が來て話をして消え去つた其話はよく憶えて居る。私が不幸な者の話を聞いたのは只六年前から牢獄に入れられてゐる異國の人のみである。吃度其人であらう。私は如何すればよろしいのか、王子は如何してゐるか、私は直ぐ罪人の處へ行かねばならぬであらう」

當惑した王女は、膝まづいて天に向つて神様に熱心に祈りをし、靈感を與へて下さるよう願つた。神様を信じて、衣服を着直し住居を出て眞暗な夜道を歩るいて行つた。宮殿内では召使も衛兵もよく眠つてゐた。

罪人は闇の中でヂッとしてゐたが突然凝視した。若い娘が近かづいた。恰かも天使の様である。女神の出現したように牢に近かづいた。ボルボンは今迄斯様な美しい人を見た事もなかつた。夢か幼の戯れと思ひ消え去るのを恐れた。乍然彼は天から救ひに來た神の使であらうと思ひ、その使者に靜かに云つた。

「美くしき神様、唯一人闇の夜を此處迄來られたのに如何して其處でためらつて居らるゝのか、私の願を聞いて下さい。貴方にお話するのを許して下さい。何卒貴方が誰方かお話し下さい」

微笑み乍ら優さしい聲で王女は答へた。

「私は王の娘です。憩くの間でしたが、眠つてゐる時、神が私の側に現はれて斯様に申しました。『貴方の未來の夫、佛陀の化身の王子が、貴方の近くで苦しんでゐる。此以上長く苦るしめてはいけない。優さしきケセイよ』と、私はお祈りをし神様の加護を信じ、私の運命を委せました。夢の

話の王子は貴方様に違ひないと考へそれを信じて床を抜け出し此處迄參りました。來る途中召使や衞兵が深く眠つてゐたのは全く神様のお助けに依るものと思ひます。何卒貴方の家の事、國の話、貴方自身の事をお話し下さつて、私の望みが確めらるゝならば、私はどんなに嬉れしい事でしよう。王子は嬉しかつた。此立派な心の持主が、自分の未來の妻であり、婚約者であるのを知つた。

「貴方の夢は我々二人を引合はせました。私は間もなく自由の身となりませう。神様の惠みに依つて夜の靜かさは、お話申すによい様にして下さつたのでしよう」

ケセイは愼しみ深く其近くに坐はり、ボルボンは話し初めた。

「私の國はクレアサンス國と申し、多くの軍隊と都には數々の宮殿を持つソウリヨ王は、五百の領土を持つて居ります。夫々王様や多數の長官役人が治めて居ります。王は私の父で女王ネアンチエアは私の母であります。我々は二人の兄弟で、兄はソウリボン私はボルボンと申します。父には第二の夫人ネアン・モンテアと云ふのがありました。父は大變に可愛がつて居りました。そして一人息子ペイ・ボンサを生みました。此夫人を持つ迄は王は母を決して不幸な目にさせた事はありませんでした。然しモンテアは將來私等二人が國王になるのが耐らへられず、私等を殺す機會を狙ちつ

て居りました。或日我々がモンテアの傍を通りましたが、私等を呼び止め腕に抱いて可愛がつて下さると思ひの外、膝の間に締めつけて皆の助けを求めたのです。私等に罪を作らせる爲めに抱いたのです。王は何も聞かずに怒り、死刑執行人に命じ即座に私等を森に連れて首を斬らうとしました。母は我々の呼び聲を聞いて私等の跡を追つて來ました。執行人は王の命に反して逃がさせて呉れました。母は吾々に立派な指環を夫々手渡し涙乍らに別れました。數ヶ月歩き乍らも二人は力を合はせ、母を思出しては苦しみに堪へつゝ、或夜コントバレーの王國へ着きました。我々は旅の者の休息所で眠りました。無情な王は眠つてゐる間に、兄を兵士を連れた役人を使つて連れ去つて終ひました。物音に目覺めた私は森の中へ逃げました。遂に兄を見出さず私は此憎くむ可き國を去りました。私は闇の嵐の中に此處に參りました。そして花賣女の小屋で助けを乞ひました。不機嫌乍ら花賣女は私を雨宿りさせ僅かの糧を與へて呉れましたが、燈火を點ずるのを拒みました。私は母の指環の効能を憶出し指に欲めました。明かるい光が輝き私を照らしました。老婆はそれを見て王に私が立派な指環を持つてゐるのを訴へに行きました。私は抗辯する餘地もなく直ちに捕ばれ、裁判も開かず私は牢屋に閉ぢ込められ、六年間飢餓と首枷と鎖に縛ばられ苦しみました。誰も私を哀

れに思ふ者もなく愛する母に再び會へる希望も、兄を見付ける希望も無く、私は苦しみました。王女よ、神は貴方を仲に立てゝ私を助けに來て呉れたのでしよう。私の運命は神様と貴方にお委せ致します」

ネアンケセイは涙に咽びつゝ歸つた。そして立派な衣服を用意して持參し、額に手を合せて禮拜しつかりとした足取りで宮殿へ引返した。其日召使や番兵が目を覺ました時は互に驚ろいて珍らしく眠り込んだ原因を尋ね合つた。王女は己が部屋に歸つてからはボルボンの事のみを考へ續けた。長い間彼を單なる一罪人と輕視した自からを責め涙を流して

「お、愛するボルボンよ、貴方は吃度立派な方になられ貴方の御一族は彌々榮える事でしよう」

と呟いた。

次いで我々はシヤボレー王國の繁榮に就いて語らう。

王はワタと呼ばれ威德並びなき勝れたる王で、部下の首長が町々を治め人民は誠に幸福であつた。王にロ・ボデイと呼ばるゝ若く美しく人々に親まれた一人の娘があつた。ソタ王はトルニツト王の友人で姻戚であり、絶えず使臣を交換し合つてゐた。

或日、無智な殘忍性に富んだ恐ろしき巨人が其王國に侵入して來た。巨人が來たので其國の守護神達は怖れ戰いて、いつも居る洞穴から遁がれ木の下に逃げ出した。巨人は洞穴に入り入口を岩を以て防ぎ大聲で王に呼びかけた。

「此國を治むる王よ、聞け、俺はサカリ・ヤツクと云ふものである。俺の力は類ひなきものである。俺はお前の國の守護神を追拂つた彼奴は遠くの木の下へ逃げ出した。お前の兵士達は物の數でない。而し此處に來たのは人民を虐げる爲めではない。只王よ、お前を喰べに來たのだ」

シヤボレーの王は己れの最後が來たのだと考へて咳いた。

「何んと可哀想な吾身よ、何んと無慘な最後でお前は殺されるのだ」

トルニツトは此恐ろしい報告に接するや、直ちにソタ王を救助すべく彼の軍隊を送らうとした。兵士達は方々から續々と大勢集まつて來た。軍船は直ちに武裝された。而し茲に重大障害が惹起した。船は塗り直され、武裝され全く準備は完了したのであつたが、どうしても水に浮べる事が出來なかつた。船大工や技師連中は遂に匙を投げて終つた。直ちに王は喇叭を吹き鳴らし銅鑼を叩いて國中に役目を果し得る者を召集し、成功すれば望み次第の恩賞を與へようと布(フレ)を廻はしたが、此緊急の召集に

應ずる者は誰もなかつた。落膽して役人達は宮殿に引揚げた。ボルボンは彼等の様子を見て訊ねた。

「貴方達は何故人々に呼び掛けてゐるのか、私に其理由を話して呉れませんか」

役人達は馬鹿扱をして何も答へず、王の許に行き牢屋の罪人が理由を訊ねたと云ふ事迄詳細に報告した。王は直ちに罪人を呼びにやらせた。

「若しお前が、船を動かせる事が出來ればお前は許され、恩賞を下されるであらう」

頭を下げて王に答へた。

「偉大なる王よ、私は成功を誇るのではありませんが、王が望まるゝ上はやつて見ませう。若しうまく成功しても私の力ではありません。それは全く神様のお蔭であると考へて下さい。何卒私に香料と臘燭と三本の美しき旗を戴けませんか」

王や首長や兵士達或るひは見物に集まつた人々の前で、ボルボンは膝まづき、神々に祈り小指で船を推した。神の惠みに依り、彼の立派な生れに依り、動かなかつた船は波の眞中に辷り込んだ。軍隊は勢揃ひし船は帆を張り上げてシヤボレーの港に到着した。直ちに其兵士達の爲めに兵舍が建てられた。王は、ソタ王が情報で知らせた町へ趣いた。

「お、忠實なる最上の友よ」ソタ王は絶望の色を現はし乍ら

「私を殺さうとしてゐる巨人サカリ・ヤツクは全く恐ろしい體軀を持つてゐる。全世界を恐怖させるに充分な巨人である」

トルニツトのポール王は彼を勵ました。

「偉大なる王よ心配無用である。貴方を助けやう、私に委せて置きなさい。私の召使の一人は超自然の力を所有してゐる。彼は唯一人で裝備された船を海上に浮べたのである」

彼は直ちに船上に留まつてゐるボルボンを呼ばしめた。然し彼は王の許に行くのを拒んだ。

「何故王が私を呼ばれたのか分らない」

王は成程と思つて更に云はしめた。

「私はお前が町近くの洞穴にゐる、王の生命を狙ふ無禮な巨人サカリと闘ふ爲めに來て欲しい」

王子は答へた。

「私は王に代つて巨人と闘ふ事を承知致しますが、或は私は死ぬかも分りません。私は王子として死に度い。私は王の章標と衣服とを頂き度い」

王は彼の望み通りにさせるよう命じた。王はボルボンを警護させる爲に勇敢な美事な戰爭用の象を遣はした。

ボルボンが町に着いた時は、王の盛裝をし象に乘つた彼の容姿は恰も全能の神の如くであつた。勇ましく自信を現はす此若い王子を見た二人の王は心から賴もしく思つた。ソタ王は彼を玉座近くに呼んで云つた。

「勇敢なボルボンよ、恐ろしき巨人と戰つて呉れ、若し勝利者となつて歸つて來るならばお前に王位を讓り退位しよう」

王の希望に答へてボルボンは敬々しく頭を下げた

「立派な王様よ、私はお望み通り戰つて參ります」

彼は神に祈り洞穴に向かつた。そして一蹴で入口を防いでゐる岩を碎いた。其果敢な振舞を見た神々は喜んで彼の成功を心から望んだ。

斯く公然と神に保護された相手が現はれたのを見た巨人は度膽を奪はれて恐れ戰いた。ボルボンは劍を抜き彼に挑戰した。

將に殺されさうになつた巨人は勝利者の前に平伏した。

「おー、强き王よ、お許し下さい。貴方の運勢は佛陀の運勢であります。貴方は何時かは此世の救ひ主とならるゝでしよう。私を殺さないで下さい私は直ちに立退きます」

ボルボンが勝利者として引揚げて來るのを見たソタ王は彼の手に輝いてゐる美事な指環を認めそして彼を熟視した。

「おー、ボルボンよ、貴方の生れは最早疑ふ可くもない。其素晴らしい美事な寶石は貴方の生れを如實に示してゐる。貴方の父が假令普通の人であらうとも貴方の運勢は佛陀の運勢である。貴方の勇氣と功績は普ねく知られた貴方は國の不幸を救つた。私は凡ゆる財寶と王冠と國土を讓り私の娘の幸福を托しませう」

トルニツトの王もソタの王と同樣の申込をなした。そしてネアンケセイと共に國土を彼に與へる事を約した。此大きな情報は全國津々浦々に傳えられ慣例に從つて人民に告知せられた。ボルボンの即位と結婚式の準備が始められた。

吉日に儀式は盛大に營まれた。二國から選ばれた美しき娘達が二人の女王に仕へた。僧侶や占星者

が集まつて將來の幸福と繁榮を豫言した。種々な催物が此祭りを飾つた町々では樂の音が聞こへ人民の喜びの聲が津々浦々に響き渡つた。

シヤ・ボレーの王位にボルボンが即いた後、トルニツト王は彼と妃に別れを告げ船に乘つて故國ボールの都に歸つた。二國の王となつたボルボンは人民に尊敬され愛慕された。各地方から拜禮の爲使者達が續々と集まつた。或日サカキ巨人に迫ひ出された守護神が親しく禮拜に來た。手に光輝く水晶の玉を持ち王に献上して云つた。

「王よ、此貴重な寶石は貴方の希望を實現致すでしよう。貴方の御治世は全く安泰でありませう。此寶玉を手にすれば空を馳ける事が出來ます。おー王よ、お願ひがあります。サカキの爲め私等は餘儀なく住居から遁がれました。私共は大木の下に遁がれ其處を住居と致しましたが、大木もよろしいが矢張り昔の洞穴の方が一層住心地がよろしい。我々の救ひ主よ、洞穴に歸る事をお許し下さいませんか」

王は答へた。

「御隨意に」

（三）

一年の後、ケセイは三月の身重となつた。ケセイは只一人故國にある父を思ひ、父に會ひ度くて食事も進まず眠りも出來なかつた。其處でボルボンはケセイを伴れて行く事にした。二人の女王は互に愛し合つてゐたので出發する迄何かと旅の注意を話し合つた。親切な守護神の贈物の不思議な水晶玉を左手に持ち、ボルボンはケセイの右腕を握つた。直ちに二人は樂々と空高く昇りボールの國へ向つた。彼等二人の出發を知つた人々は悲しんだ。

「王樣よ、何故に唯一人ケセイ女王と共に兵士も召使も連れず、我々の國を立たれたのですか、何處へ行く爲めに空を飛ばれたのですか、萬一事件が起ればどうすればよろしいのか、我々は誠に心許なく思ひます。戰爭でも起きればどうして知らせに行かれませう」

夫が出立した後で急に淋しくなつた溫順なロ・ボデー女王は涙を止める事が出來なかつた。

「愛する夫よ、貴方は供も召使も伴れずに御出掛けになつた。二人は何不自由もなくお暮し遊ばした。左樣な遠い處へ行かれるのは私は心配です。何故私も連れて下さらなかつたのでしよう。私も空を飛んで後を追ふ事が出來ないものでしようか」

ネアンケセイとボルボンは雲の中で旭日の如く輝いた。最初の日は三十里飛んだ。そして離れ島に草庵を見留めて其處へ行かうと思ひ地上に下り、隱者に挨拶に行つた。

「貴方達は一體何處から來たのか、五千年前から私は此島で祈り暮して來たが誰れにも會はなかつた。貴方達は海を渡つて來られたかそれとも、空を飛んで來られたのか」

ボルボンは敬々しく挨拶して

「尊敬する隱者よ、我々はシヤ・ボレーから親に會ふ爲めポール國へ行くのです。此不思議な水晶の玉により我々は空中を飛ぶ事が出來ます。此島に貴方を見て我々を祝福して戴き度いと參つた次第です。貴方の籠を貸して下さいませんか、野原に行き花を集め花束を聖なる祭壇に供へようと思ひます」

ボルボンは隱者に玉を托しケセイと花を集めに出掛けた。二人が出掛けた後で隱者は貴重な寶玉をヂツと見詰めて居たがそれを自分のものにせんと思つた。

「數世紀の間、空を飛べる樣にと祈つて來たのだ。斯くて五千年は經つた。此人間達が疑ひもせずに托した此美しき寶玉は恐らく到底持つ事が出來ないであらう」

隱者は其素晴らしい寶玉を手に取つた。彼は喜び限りなく容易に空を飛ぶ事が出來、遂に何處ともなく飛び去つて終つた。然し彼は方向が分らなかつた爲めに大風が吹き凄ぶ恐ろしい圈內に入り渦卷が彼の體を翻弄した。瞬間體はバラ、、になつて海の底深く投げ込まれた。正に天罰であつた。水晶の玉はソウリボンが治めてゐるコントボレーの都に落ち地上でキラ、、と光つてゐた。一人の役人が見付けて王の前に差出した。直ちに寶物掛りに報告された。

偖而、ボルボンとケセイは花を摘み束として隱者に渡す可く歸つて來たが隱者の姿が見えず、又水晶の玉も無いのを見て二人の歎き悲しみは茲で述べる事が出來ない程であつた。二人は絕望した。

「確かに隱者が寶玉を盜んで逃げ去つたのだ。あれは我々の唯一のものである。宗教家ともあらうものが奪つて逃げるとは怪しからぬ。おー愛する妻よ、お前には大變氣の毒である。今迄は慘じめな暮しも苦しみも知らずに宮殿で暮して來たのに」

二人は不止得隱者の草庵を出で運を天に委かせて山を越へ野を進んだ。間もなく疲れた二人は或假小屋に辿り着き悲しみの裡にも休息場所を得たのを喜んだ。

其島に二人の人間が來たのを間もなく其處に住んでゐる惡靈が人間の臭氣で感付いた。惡靈は小屋

の外から怒號した。そして恐ろしく棒を風車の如く振り廻し乍ら

「如何なる勇敢なる人間が俺の住居を奪はうと云ふのだ。俺は如何にして人間を殺すかをお前等に見せてやらう」

ボルボンは勇敢に應じた。

「下道奴、私が如何程お前に勝れてゐるかを知らぬな」

僅かの祈りに忽ち神々は集まつて來た。それを見た惡靈は恐れ慄のき平伏して逃げ出した。

「此恐ろしき人間は何處から來たのであらう。何とかして殺してやり度いものだ」

王は妻を抱き乍ら

「愛する女王よ、此危險な場所から離れよう。惡靈がつき纏とつてゐる何時かは彼奴の餌食になるかも知れない」

夜の明け方になつて二人は廣々とした海の岸邊に辿り着いた。其處は風と浪の音しか聞こえなかつた。ボルボンは落膽したが海岸から少し離れた處に漸く二人を支へ得る流木が浮かんでゐるのを見付けた。容易に二人は體を乘せる事が出來た。幸にも風は二人を對岸近くに導いた。然し間もなく過去の罪を償ふ時機であつたのか突然恐ろしき嵐が起り眞暗闇となり、咫尺も辨ぜぬ天候に變つた。波は物凄ごく、不幸な二人は支へる術もなく遂に離ればなれになつて終つた。

女王は波に浚はれて或海岸に疲れ果てゝ打上げられた。辛ふじて立上りボルボンの名を呼びつゝ行きつ戻りつして居る内に力も盡きて倒れてしまつた。

「私の愛人よ岸邊に打上げられたのか未だ浪の中にゐるのであらうか、海の恐ろしい怪物の餌食となつたのではなからうか、或は岸邊に打上げられて野獸に身を曝らしてゐるのではなからうか。噫!!海や岸邊を治めて居る守護神よ私の悲しみを哀れんで下さい。私の愛人の行方を知らせて下さい。何處に行けば見付ける事が出來ませうか、私は會い度い側に居度い。噫!!廣々とした森よ、茂る樹よ、咲ける花よ、私の悲しみを察して下さい。慘酷な運命に依つて私は夫を奪はれました。私は悲嘆に暮れて居ります。助けて下さい。若し見付け得なければ私は死にます」

女王は夫の名を呼び祈り嘆き悲しみつゝ精根も盡き果てゝ砂の上に倒れてしまつた。憩らくして我に返つた女王は泣くのを熄めて木の枝を折り其端きに身につけてゐた飾帶を結すんで印とした。それから三ヶ月の身重であり乍らも、森の中谷の峽を探がしつゝ走つた。足は破ぶれて道には點々と血の

跡をつけた。やがて道に迷ひ力盡きて靜かに風の吹いてゐる大きな木の下に身横へた。其森は深林で起伏した森であつた。四ヶ月の間野獸に氣を配ばり乍ら默々と流浪らひつゝ遂にソウリボンの治めてゐる王國の境に辿り着いた。着物はボロ、、となり僅かに木の葉を綴つて身を隱してゐた。知らず知らずに都に近かづいた。

近くの村に上手な老獵師が住んでゐた。獵には何時も犬を連れ槍と弓を武器とし矢袋には鋭どい矢を一杯充めてゐた。其日も何時もの通り野に出て森に入り獲物をあさつてゐた。突然犬が躍上り變な着物の者に突進した。それはネアン・ケセイであつた。激しい犬の叫び聲に獵師は驅けつけた。ケセイは力の限り遁がれた。犬が危く飛び掛らうとした時、險阻な谷間に飛び込んだ獲物だと思つて老人は犬の叫び聲に隨いて獲物の後を追ひ弓を引絞ぼつた刹那始めてケセイを認めた。

「適切り怪物が己れの腕を試めさうとしてゐるのかも知れない」

獵師は大聲に叫んだ。

「お前は森の惡靈なのか、それとも人間か」

「おゝ、善良な老人よ、私は夫と海で嵐に會ひ浪に浚はれて別れ別れになりました。私の心を察し

挿畫　ボルボンとソウリボン

て下さい。私の不幸を哀れんで下さい。何卒私を召使つて下さい。出來る事は何んでも致します。

私の話を信じて下さい」

老人は大きな刀で木の枝を切り拂ひ梯子を作つて谷に吊し、餘分に着てゐた着物を投げ與へた。助けられたケセイは直ちに着物を纏ひ梯子を攀ぢ登つた。獵師は獵の事も忘れて種々と介抱し己が家へ連れ歸つた。

彼の妻は二人が一緒に歸つて來たのを見て、意地悪い嫉妬深い彼女は怒つて後ろを向いて叫んだ。

「年寄りのくせに尙女を持たうとするのか、吃度今迄私に內密で森の中に小屋を建て子供が生れる今となつて不止得連れて來たのであらう。貴方は親切な方ね」

「妻よお聞き、愼しみなさい。意地悪い事を云ふのを控へなさい。左樣な事を云ふものぢやない。私が話す迄待ちなさい。女は嵐で夫と別れた不幸な方だそして唯一人で辿つて來たのだ。私は可哀想に思つたので夫が見付かる迄養なつてやらうと連れて來た。私の愛情をお前から奪つたような言葉は愼しみなさい」

然し夫の話の終らぬ裡にケセイに向つて

「お前さん、お前の事を兎や角云ふ夫を如何扱ふか見て居なさい。可哀想な別嬪さん。お前は密通したのだ。裁判官はお前を罰するであらう。吃度罰金をとりそして首枷を欲めいつか首が飛ぶであらう」

斯く云ひ乍ら老人に飛びかゝり、髮の毛を掴み爪で顏を引搔いた。誰れも彼女を宥める術もなかつた。更にケセイに向つて

「圖々しいにも程がある。男盜人、直ぐに出て行つてお呉れ、私の家に泥を塗つた」

素直な心根の哀れな犧牲者は呟いた。

「私は殺されるなら防ぎ樣もない。乍然夫を見出す迄は此善良な老人の側に居やう。私の爲めに斯程苦しんでゐるのに感謝の誠を示めさなければならない」

雨の降る闇の夜に老婆は家の濕めつた土間にケセイを寢かせた。斯くて可哀想なケセイは召使となり十ケ月の身重となつた。或日嵐が吹く時にケセイは陣痛を感じた。そして助けを老婆に求めた。

「側へ寄つて來なさるな、直ぐ出て行つてお呉れ、私は子供を持つてゐない。そんな苦しい樣を見るのは好かない」

「何卒お願ひです此儘家に置いて下さい。此雨と雷の最中に何處へも行かれません」

「それぢや犬小屋へ行きなさい」

彼女は追ひ出す爲め戸を開いて突出した。ケセイは雨の中で犬小屋を捜がしたが苦しくて不止得地面に座はらねばならなかつた。痩せた顏の上に涙と雨がとめどなく流れた。

「愛する夫よ、貴方は死んだのですか、若し生きてゐるなら何處へ探がしに行けばよいのでしよう貴方が海の底だと云へば喜んで海の底へ參ります。私は貴方なしでは生きて居れません」

神の惠みに依つて全智全能の神は彼女の境遇を知つた。直ちに優さしい老婆の姿に變り側に行つた。

「若し娘さん。斯樣な時に此處で何をしてゐるのですか」

「親切なお婆さん、私は嵐で夫と別れ捜し求めたのですが遂に迷つて此獵師の召使にならねばなりませんでした。然し此處の老婆は意地惡く私を酷どい目に合はせ、私が子供を生むのを嫌つて今私を追ひ出したのです。優さしいお婆さん、私は大變に苦しんで居ります。私は生きる望みはありません」

ケセイは死を覺悟して涙を流しつゝ神へ心からお祈りをした。

「噫!!無情な運命よ、貴方は私の夫を奪ひ私から隱くして終つた。夫が生きてゐるのなら私は死ねない何處迄も捜がします。夫が死んだのなら私は死にます。何卒來世で一緒にさせて下さい。何時迄も離れようぬにして下さい。夫が空を渡る鳥であつたら私は鳥になりませう。野獸なら野獸になりませう、魚なら魚になりませう。私は生死を共にと願つてゐます。私の祈りをお聞き下さい。神樣私の最後の願を聽いて下さい」

ケセイは老婆に賴んだ

「親切なお婆さん、私の子供を救つて下さい。私の命を助けて下さい。夫も共に御恩に被ます」

老婆はケセイの肩を摑み乍ら

「最早心配せなくてもよろしい。私が隨いて居てあげます」

ケセイは美しい男の子を生んだ。

神は子供を見て喜んだ。

「彼は私の孫とならう」

老婆は火を起しケセイを暖ためて云つた

「私の家は宮殿の東にあります。私は此美しい子供を連れて行つて育てませう。貴方が會ひ度くば何時でも遠慮なくお越しなさい。何か印るしに首に架けて下さい。貴方は唯一人で意地悪い女主人の家では子供を育てる事は出來ないでしよう。屹度子供は死んで終ひます」

「親切なお婆さん、有難とう御座います。子供をお願ひ致します。何卒可愛がつて下さい。貴方のお好きな樣に育てゝ下さい。私は夫を見付けたら返して貰ひに參ります。私は心から恩に報くいませう」

ケセイは生れた子供を胸に抱き締めて

「可愛い子供よ、私は別れるのが如何程辛いか悲しいか分りません。私は召使の身分で何もしてあげる事が出來ない。無情な女主人はお前を殺して終ふでしよう。私は堪えられない。私は此親切なお婆さんに預けます。一ヶ月以内に私は主人からお暇を貰らつて會ひに行きます。そしてお前を育てます。それからは二人で暮します」

ケセイは大切な印るしとして夫の指環を老婆に托した。

ネアン・ケセイが獵師の家に歸つた時、女主人は問ひ詰めた

「賤しい女、それではお前は子供を捨てたのだね」

「貴方は子供を見るのをお嫌ひになつた。私は孫として養子にする慈悲深い或人の世話に托しました」

◎

ケセイが立去つた後で、神は立派な敷物の上に子供を置き母から渡された指環を首に吊し禿鷹に變形して翼を張り雨や露や太陽から子供を護もつた。

既に長くコントボレーの王となれるソウリボンは森を散策せんと朝早くから王服を纏ひ冠をつけ王象に跨がり多くの從者を從へて出立した。人民は敬々しく平伏して王樣を出迎えた。偶々獵師の小屋の前を通り不圖禿鷹に心索かれた。從者や護衛の騒ぎに不拘翼を擴げたまゝ無關心の態度であつた。

「あの禿鷹の喰べてゐるものを調べに行く者はないか」

急いで數人の者が王の命令に應じた。禿鷹は飛び去つた。其處に從者は子供を見付けた。

「王よ、天使の如き美しき赤兒が立派な敷物に寢かされ捨てられて居ります。禿鷹は我々が近寄つ

た時子供を喰べやうとして居りました」

此場に出合つたソウリボンは命じた

「私は子供を見度い、誰れか子供を連れて來い」

注意して赤兒は王の前に差出された。王は腕に赤兒を受取つて云つた

「私は此美しい子供を養子にしよう」

王は赤兒を愛撫し首に吊るされた指環を認めた。そして其指環を己が指環と較べて全く同一物なのを知つて驚ろいた。彼は自分の腕に弟の子供を抱いて居るのに相違ないと確信した。

「可愛い子供よ、何と云ふ幸運か私の腕に抱かれて、然し何故お前は一人なのか、父は何處にゐるのか、おー、不思議な運命よ、前世の報いとは云へ何故に斯く迄に我々を苦しめ別れ別れにさせて置くのか」

涙が頰を傳つた。早速其附近の凡ゆる場所に兩親を探がす樣に命じた。從者は手分けして搜がしたが皆目分らなかつた。誰れも汚ない小屋に訊ねて行く考へが浮かばなかつたのである。

王は止むなく宮殿に歸り、早速乳母を求めた。彼は四室の立派な家を小さな王子の爲めに建てる可く直ぐ樣命じた。そして其家の壁に彼が子供の折り兄弟で暮した場面を寫し色を彩つて飾る樣に命じた。

終日彼は銅鑼や太鼓で國民に向つて新築祝の爲めに盛大な祭を行なふ事其節は莫大な施し物がなされる事を布れさせた。當日は凡ゆる人々が小さな宮殿に入る事を許され訪問者には特に選ばれた番兵が壁に描かれた場面に就いて說明するであらう事を知らされた。

準備は全く整なつた。王は番兵に其繪を見た訪問者が如何なる態度をとるか直ぐ樣知らせに來る樣にと命じた。

◎

では不幸なボルボンの話に戻ろう。

愛する妻と引離され彼は恐ろしき海と生命を賭して爭つた。必死の努力の結果漸く岸邊に着いた。彼は凹地や岸邊の端々迄懸命に搜がしたが、妻は見當らず悲嘆に暮れた。彼は叫んだ

「愛する妻よ我々二人が斯くの如くならうとは噫!!何故此旅を見合はせなかつたのだらう。私は何處へ搜がしに行けばよいのか、お前は海の藻屑と消え果てたのか、海の怪物に食はれたのか。或は

直ぐ様親切な漁師に救はれたのだらうか」

不幸な目に會つたボルボンは悲嘆に暮れて海岸に沿つて歩いた。浪の騒ぎのみが彼に答へた。突然彼は離れた岸邊に標しを見付けた。希望に燃えて急ぎ進んだ。風に翻へる布は丁度愛する妻の如く思はれた。彼はネアン・ケセイの飾帶を認め又砂の上に足跡を見た。彼は苦惱した。

「お前も此處に來たのか、然し飾帶と足跡を殘して如何した事か。屹度お前は此輕い布を希望の標しとして木の端に掛けるだけの餘猶しかなかつたのであらう。愛する妻の身につけた此飾帶、離れた妻の唯一の思出の此布よ、おー孤獨よ、彼女の苦しみを私に語つてお呉れ、妻は獨りで迷つてゐるのではなからうか。何卒彼女を哀れんでやつて下さい。お前は立派な衣物を數々持つて居た。お前が疲れると云ふのは宮殿での遊びのみである。お前は天使のように侍しづかれて來た。それが今お前は半裸となり激しい太陽の下で果てない森をさ迷つてゐるのであらう」

彼はケセイの足跡の砂の上に倒れて終つた。氣付いた彼は再び新らしい足跡を辿り森の端迄來たが其處は一面草で掩はれてゐたので最早足跡を見出す事が出來なかつた。長い間妻を呼んだが山彦のみが彼に答へた。七ヶ月の間森の凡ゆる場所を搜し廻はつたが遂に見付からなかつた。やがて野原に出

で悲嘆の裡にコントボレーの都に辿り着いた。

多くの人々の集まりから王が壁に子供時代の各場面を寫した小さな館の落成式の爲、盛大な祭典が行はれ、宮廷にて多くの施し物をするのを聞いて彼は呟いた。

「私も行かう。左すれば施し物の分け前に預かるであらう。そして壁畫を見よう」

役人達は彼を見て内に入らせ色々な糧を與へ新らしい衣物を着せ、壁畫の前に伴つた。役人は彼に其繪の場面を說明した。最初は王と其弟が母の傍で幸福に平穩に暮した幼年時代の繪であつた。役人が說明するに連れてボルボンは其内容が自分の生涯其儘であるのを知つて心がときめいた。彼は跪いた。

「あー、不思議な運命よ、自分が母の傍で兄と共にあの幸福な喜びに浸つてゐる。此處でネアン・モンテアが我々を腕に抱いたのだ。次の繪は王が怒りに滿ちて我々を殺す樣命じてゐる所が描いてある。此れは我々が死刑執行人と森に向つて恐ろしい歩みを續けてゐる所だ。狂氣せる母が我々を追つてゐる。此處で母は死に、そして甦み返つたのだ。驚ろいた執行人が感動して跪き我々を助命して二人の出發を見送つてゐる。此處では我々二人はバスキム國の女商人の間を通つてゐる。我々

があの木の上で最初の夜眠つた大きな木がある。夜明けに初まつた雄鷄の鬪ひだ白と黑の鷄が力盡き二羽共死なんとする處、出發の前に肉を焙ぶる爲我々が燃やした火だ。愛する兄が奪はれた我々が宿つた最後の小屋だ。

「おー、役人達私の愛する兄に會はせて下さい」

涙に眼が眩み息が栓まつて倒れた。役人達は倒れた儘にして事情を感づいて其場を外づし出來事を王に申上げ樣と急いだ。

「一人の貧しい然し若く美しい王樣にそつくりな異國人が今小さな御殿に現はれました。我々は命ぜられたものを與へ食事の後繪の前に連れて行きました。其處で我々は說明を初めました處が異國人は繪を知つてをり、非常に感動して地上に倒れ氣を失なひました」

ソウリボンは卽座に走り行き、弟を見て腕にひしと抱き上げた。

「おー、愛する弟よ、可哀想な者よ、お前を見失なつてから長い間私は毎日思出しては悲しみに包まれてゐた。一日としてお前の優さしい思出を忘れた事はあらうか、私の大切な寶よ、流浪の果ては遂に慈悲深い神樣は我々を廻り會はせて呉れた」

嬉し涙が流れた。苦しさを忘れてボルボンの心も同時に喜びに包まれた。苦惱は流れ出る涙に連れて薄められた。ボルボンは今迄の苦し味を兄に物語つた。

「愛する兄よ、如何にして私は斯く生きて來たのか分りません」

彼は唯一の憶出たる指環の話をし其爲めに蒙つた六年間の受難生活を物語つた。又船を水に浮べた事、巨人との戰の勝利、戴冠式、結婚、空中の旅、島に降りた事、隱者の盜み、鼠、別離と次々に物語つた。

「愛する兄よ、私は救はれた愛する母に再會出來るのは貴方に賴らねばなりません、私は貴方が死んだのではないかと思ひました、貴方は連れ去られ私は不幸な目に陷入りました。貴方が此美しい國の王として見ようとは夢にも思ひませんでした。あー全く夢です。斯樣な苦難の最中に貴方に會はうとは、私は最愛の妻を失なひました、妻は一度も味はつた事もない慘じめさに苦しんでゐるに違ひない、三ケ月の身重でした、それから早や七ケ月にもなります。」

ソウリボンは云つた。

「愛する弟よ、お聞きなさい、私は道で立派な敷物の上に寢かされた生れて間もない捨てた男の子

を拾つた、其頸には指環が吊られてゐた。此子は我々血統の者に相違ない吃度お前の子供であらう私は指環に依つてそれを知りました。其時貴方達を見つける爲め凡ゆる場所を再三再四捜がさせたが見當らず私は繪の部屋を考へつき落成式にお祭を行なひ、數々の施し物を與へると布をさせたのです此方法がうまく的中して神様のお蔭で私は愛する弟を見出す事が出來ました。」

「愛する兄よ、貴方の拾はれた子供を早速に見せて下さいませんか」

小さな王子は間もなく多くの召使に侍づかれて連れて來られた。ボルボンは子供の頸に輝いてゐる指環を見て可愛氣に子供を抱き涙をたゝへて云つた。

「可愛い子供よ、神様のお蔭で私は今お前を抱く事が出來た、如何して道に捨てられたのかお母つさんは何處にゐるのだ、私は妻の命が心配である。心なき殘酷な人の手に掛つてゐるのではないだらうか」

斯く考へて來ると心の中が栓まつて其場にバツタリと氣絶した。弟の樣子に驚ろいたソウリボンは弟の顏を冷たい水で濕らせたので漸く息を吹き返した。

哀れなケセイは女主人に仕へて居たが、ケセイの優さしい心根にも拘らず絶えず無慘に取扱はれ侮辱されてゐた。老婆は情容捨もなく毎日醋使した。七日の後、ケセイは暇をとり子供に會ひに出掛けた。そして宮殿近くへ無意識に入つて行つてケセイは親切な老婆の小屋を捜がしつゝ子供に建てられた館の近くをさまよつた。

丁度ボルボンは館の入口で淋しく外を眺めて居たが、圖らずもケセイを見つけ立ち去つて行く後ろから走り寄り帶を摑へて腕に抱き締めた。憩らくの間お互に涙を流し不幸を語り合つた。ボルボンはケセイを家に入れ、兄が子供を引取つた譯を話した。ケセイは子供を抱いて接吻し愛撫した。

「あー、私はお前に會へた。斯樣な嬉しい事は又とあらうか、私はお前の伯父がお前と父とを引取つてゐられた事に神樣に感謝せずにはおられません。之れからは決して離れません、私はお前の顏を見ないで七日も經ちます。お母つさんは親切なお婆さんが育てゝゐたとのみ思つて居ました。お婆さんはお前を孫にすると云つてゐました。そのお婆さんが道に捨てたとは如何しても信じられない。そして禿鷹が羽根の下にお前を見守つてゐたとは如何した事でしよう。神樣が老婆の姿に變へて助けに來られたのではないだらうか。」

ケセイが嬉し涙に浸つてゐる時、兄王はケセイを女王サー・ボフアの許へ伴つた。ボフアは非常に

喜んで迎へた。

ソウリボンは弟と其家族が彼の許に集まつたので、喜びの機會に盛大な祝典を營なんだ。次いで祭りの最中に子供の爲めに禮拜に集まつた貴族や大衆のお祝ひの詞の裡にボルボン・サウリアと名付けられた。

（四）

或日ソウリボンは弟に云つた。

「弟よ、お前は私にあの不思議な水晶の玉に就いて詳しく話さなかつたが、其經緯を知り度いものだ。私は或日素晴らしく美くしい玉を贈られ大切に藏まつてあるが、若しやそれがお前の失なつた玉ではないだらうか。」

希望に滿ちて、ボルボンは一見を求めた。役人は敬々しく持つて來た。

「アツ、之れは確かに私の寶玉です。兄さん若し貴方が玉の力を示めせと仰しやるならば早速お目に掛けませう。」

玉を手に取り回轉させた、彼は忽ち空中に躍り上り城壁を一周し次いで宮殿の上を大きく圓を描がきソウリボンの足許へ降り立つた。

彼を見た人々は驚嘆し街中の者は膽を奪はれ眼を瞠つた。

ボルボンは敬々しく一禮して云つた。

「兄上、母は十年經てば歸つて來る樣に申しました。母は絶えず私等の事を考へて居るでしよう。母への勤めを果たし度いと思ひます。私は母の悲嘆を思ひ故國に爲さねばならぬ責務を果し度いと思ひます。今貴方にも會へたので直ぐにも出發致し度い。後には船の準備だけです。」

ソウリボンは云つた。

「それは結構な事です。私は地上部隊を組織して水陸兩方面から行く事にしよう。我々の進軍を知るや凡ての障害は取除かるでしよう。必らず成功する事でしよう。」

ボルボンは更に云つた。

「私は貴方に憩らくの間、ケセイと子供をお預り願ひます。今迄不幸な目に會つてゐるので何卒よろしくお願ひ致します。」

次いで妻のケセイに別れの言葉を告げた。

「愛するケセイよ、私は己が王國に歸る爲愈らく別れねばならぬ。可哀想なロ・ボディは心配してゐるに違ひない。長い間の不在で悲しんでゐる事であらう。私の出發に泣いてはいけない。此喜びの日に嘆いてはいけない。私はお前を連れて行き度い。離れたくはない。然し私の要務を果たす爲めには左樣には參らぬ。私は水晶の玉を再び役立てよう。母の許へ歸る準備だから不在の間は極く短かいのだ。忠實なお前よ、子供に氣を付けてお呉れ、私はロ・ボディと召使を連て戻れつて來ませう。」

語り終へてボルボンは空高く飛び去つた。美事な飛翔は極樂の鳳凰の如くであつた。

◎

ボルボンは僅か一日で都に達した。そして愛するロ・ボディを腕に抱いた。ボディは夢かと許り喜んで別れてゐた間の悲しさや心配を物語つた。ボルボンはケセイの話をした。二人が別れ別れになつた無慘な有樣を語つた。ボディは話を聞いて泣いた。それから二人は老王の許へ挨拶に行つた。老王は非常に喜んで歡待した。

「愛する子供よ、お前が居なくなつて如何に悲しく心細かつた事か、いつもお前の事許り無事を祈つてゐた。ケセイは如何した幸福にゐるか、お前が歸つて來るのに何か事づけはなかつたか」

ボルボンは二人に起つた不幸な物語を詳さに老王に告げた。ソタ王は涙を止むる事が出來なかつた。ボルボンは、次いでトルニツト王の許へ趣いた。義理の父に經た不幸な物語をし次の事を依賴した。

「父よ、私に五百艘の船と軍隊を生國に行く爲めにお願ひ致し度い。」

老王は答へた。

「此國はお前のものだ、お前の好い樣にしなさい。」

ボルボンは選拔した軍隊と共に乘船した。そしてソタ王の許に歸り又同じ求めを乞ふた。直ちに軍隊は集められ、船は艤裝された。そこでボルボンは父に向つて、

「偉大にして優さしき王よ、私は王道樂土と繁榮を心から祈りつゝやがて歸つて參ります、私は貴方の娘、私の妻を私の優さしき母に會はせる爲め同行して宜敷しいでしようか、お願ひ致します。」

ソタ王は可愛いボディを手許に置きたかつたが、望みを拒ばまなかつた。

「愛する息子よ、私は拒む事は出來ない、行きなさい。神樣は必つと守るでしよう。然し早く歸つ

て來てお呉れ、お前が王位に卽くのが私の一番樂しい事であるのを忘れないでお呉れ、お前は神の引合せで私等一族の救世主である事を忘れないで欲しい。」

次いで娘に云つた。

「可愛い娘ボディよ、私はお前に云つて置く、常に夫に從ひ敬ひ優しかれ、無事に彼の國に着いたら生みの親の如く兩親に仕へよ、眞の生みの娘らしく仕へよ、お前が行く國の神々へ祈りを捧げよ侍しづく者達には親切であれ、不幸な者へは哀れみを垂れ、嫉妬をしてはいけない、よく愼しみなさい、夫に不名譽を蒙らさうとする者があつても怒つてはいけない、よく王樣に申上げる禮度を持ちなさい、夫が夜寢る時はお前は少し低い方に休み同列に眠つてはいけない。」

娘は心から父の忠言にうなづき二人は膝まづいて王に暇の拜禮をした。

船は風を張らましてコントボレーに向つた。

ソウリボンは喜び歡待して宮殿に導いた。ケセイとボディは相會し抱き合ひ何時迄も語り合つた。ボディは小さな王子ボルボン・サウリアを抱き優しく膝の上に乘せて接吻と愛撫した。ボディは子供の不幸な生ひ立ちを聞いて涙を流した。

「可愛い子供よ、神樣の加護がなければどうして斯樣な不幸に耐えられるでしよう」

ボルボンは兄に云つた。

「遂に我々は一緒になりました。兄さん、さー、我々の計畫を實行致しませう。兩親の王國に向つて出發致しませう。」

ソウリボンは答へた。

「海軍はお前が指揮してお呉れ、私は陸軍を指揮しよう。我々は父の王國へ海陸同時に入る事にしよう。そして直ちに都を封鎖しよう。」

出發の最後の準備が急速に整へられた後は兄の出發命令のみとなつた。陸軍は秩序整然として命令は隅々迄行はれた。ソウリボンは最も勇敢なる勇士を前衞とし、武勇赫々たる者を選んで隊長に定めた。武裝も美々しく無數の兵士の足音は大地を搖がせた。勇士の面々は腕を振ふ機會の到來を遲しと待つた。隊旗は翩翻とひるがへり威武天を衝いた。ソウリボンは女王を伴つてゐたので、美しい侍女が其後に續いた。準備は完了し堂々と進軍した。先きを急ぐ陸軍は道は遠く苦しき行軍であつたであらう。

ボルボンは艦隊を編成した。水兵は何れも猛者達許りが乗込んだ。多量の糧食が積込まれた。マストの上には翩翻と旗差物が風に翻がへつた。選抜された一隊は彼の護衛となつた。無數の艦隊は陸軍と同時に出發した。

彫刻された美しき花瓔絡で飾られた艦には若き王と女王達が乘船した。三人は飾られた象に乘つたソウリボンとサーボフアと希望と祈願を交し乍ら離れて行つた。

やがて風が吹積り浪は高く舷側に碎け水と空の果てしない擴かりしか見られぬ樣になつた。夕刻には艦隊は或島に投錨した。水夫達は食を攝り力を恢復した。皆は月と星の輝く空の下に樣々な海獸の跳躍を眺め賞した。翌日渡航は續けられた。

進軍の話は茲に止めて、ソウリボンとボルボンの兩親であるソウリヨ王とチェア女王の話しに移らう。ソウリボンとボルボンが九死に一生を免がれて遁がれた後は如何なつたであらうか、チェアの悲嘆は王を激昂させ宮殿から追拂つて終つた。捨てられたチェアは心から同情せる死刑執行人から毎日生きるに必要な米や飲物や薪炭を密かに屆けて貰つて、僅かに露命を繋いでゐた。王の怒りを恐れて誰れも救ふものは無かつた。

七年後ペイボンサは十二歳となり、退位せる王の後を繼いだ。彼は五百の公國を治め、毎歳莫大な財寶が貢物として納められ、治世は繁榮し太平が續いた。

捨てられた不幸な女王チェアは子供達が十年後に必らず歸國するよう賴んだが、年月は段々と經つた。確信を持ち乍らも絶えず心に懸り別れて以來いつも憂へてゐた。そして再會を樂しみに慘ぢめた生活を續けてゐた。或夜嬉しい夢を見た。それは息子達が二人共立派な若者となつて丈夫に育つて歸つて來た夢であつた。二人は自分の足許に身を投げ母の慘ぢめな姿を見て苦惱した。チェアは二人を腕にひしと抱いた。三人が無事に再會出來た喜びと幸福に、思はず嬉しさの餘り飛び上つて目を覺まし

したのであつた。目覺めてからも尙、息子を抱いてゐる樣な氣がした。深い暗闇は現實を呼び覺ました。チェアは落膽し絶望の果ては倒れて終つた。

「愛する子供達よ、私は何んと不幸な身の上であらう。私は毎日苦しんでゐる。お前達が發つてから十年は過ぎた。私は執行人の情で僅かに露命を繋いでゐる。」

◎

其日の明け方であつた。多數の軍隊が其王國に侵入した。そして一路都を指して進軍した。人々は

周章狼狽してなす事を知らなかつた、王は侵入を目擊した飛脚に依つて知らされた。

「大王よ無數の軍隊が侵入して參りました。何者を以つてしても勇敢な進軍を阻ばむ事は出來ないでしよう。」

或者は走り來たり報告した。

「海上からも大艦隊が進んで參ります。海は艦隊で埋まつてゐます。大王よ、我等の不幸を救つて下さい。」

ペイボンサは直ちに軍隊を動員した。軍隊は平時より訓練せられ立派に武裝された勇敢な兵士達であつた。其時敵は都に突入し、將に王宮は包圍されんとしてゐる、と云ふ報告が齎らされた。

若きペイボンサ王は叫んだ。

「皆の者、指揮官兵士よ、恐れるな、彼等が如何に强く共敵は我等に打勝つ事は出來ない。」

二人の兄弟王は軍隊を合した。武裝したボルボンは兄の陣營に見參した。二人の王は勇敢なる兵士に圍繞されて、大陣營の眞中に急速に建てられた高臺の上に坐した。そして直ちに老王へ使者を走らせた。

「ソウリヨ王の許へ行け、我々は此國土と王冠と財寶を望める事を傳へよ。若し拒絕せば直ちに開戰となるであらう。」

使者は直ちに出發し、老王に二人の王の要求が傳へられた。敵の要求を聞いた老王は絕望の叫びを洩らさゝるを得なかつた。

「若し戰に敗ぶれたら私は殺されるであらう」斯く思ふと、抵抗力も失なつて震え上つて終つた。神は老王に第二夫人ネアンモンテアに對する偏愛行爲の報を齎らしたのである。老王は若き王ペイボンサに云つた。

「おゝ、子供よ、お前は私を救ふ可く如何に決心をするか、彼の申出を受けねばならぬか、我々は今から兵士を集める事が出來るだらうか、早や王國は彼等の手に歸してゐる。人民は彼等の自由になつてゐる。不幸な鬪爭は恐ろしき結果を齎らすであらう。我々も死なねばならぬであらう。」

ペイボンサは答へた。

「父よ、國の運命は御心配あるな、敵軍は無數です。王國が彼の掌中にあり、彼等の武力の恐る可きものであるのも事實です。然し我々も彼等と充分に戰ふ事は出來ます。勝敗は時の運です。或ひ

は敗ぶれて攻めたてられるかも知りません。貴方は私を闘はずして退かしめる事は出來ません。若し我武力の勝れる場合は國を守る事が出來ます。敗ぶれば敵に王國を委すのみです。私は戰死をすれば男子の本懐です。決して悔いないで下さい。父よ、人は生れば死ぬものです。私が生きてゐる間は何物も恐れずにゐて下さい。我々は未だ敵手に委ねられては居りません。」

「お前が飽く迄戰ふ所存ならば、お前から使者に其由回答してお呉れ。」

ベイボンサは答へた。

「使者よ、王に回答せよ、我々は懇願せねばならぬ動機も理由もない。飽く迄戰ふ所存である。我々の運命は一戰に托する。吾れは象に乘り一騎打を欲するものである。お前の主人と吾れのみが象に乘つて戰はう。」

使者は回答を聞き敬々しく若き王の許を辭し、營所に引上げた。

同盟の二兄弟は相手の挑戰を喜んだ。ボルボンは直ちに兄の前に膝まづき「兄よ、私を闘はせて下さい」と云つた。

ソウリボンは「望みに委せる」と答へた。

其處でボルボンは兄に一禮して、

「私は勝利を確信します。兄よ、象の上の闘ひは少しも恐れません。私が腕前と力を示すのを御覽下さい。何卒御心配なき樣、私は父の王國を取り貴方に差上げます。貴方は此高臺から見て居つて下さい。」

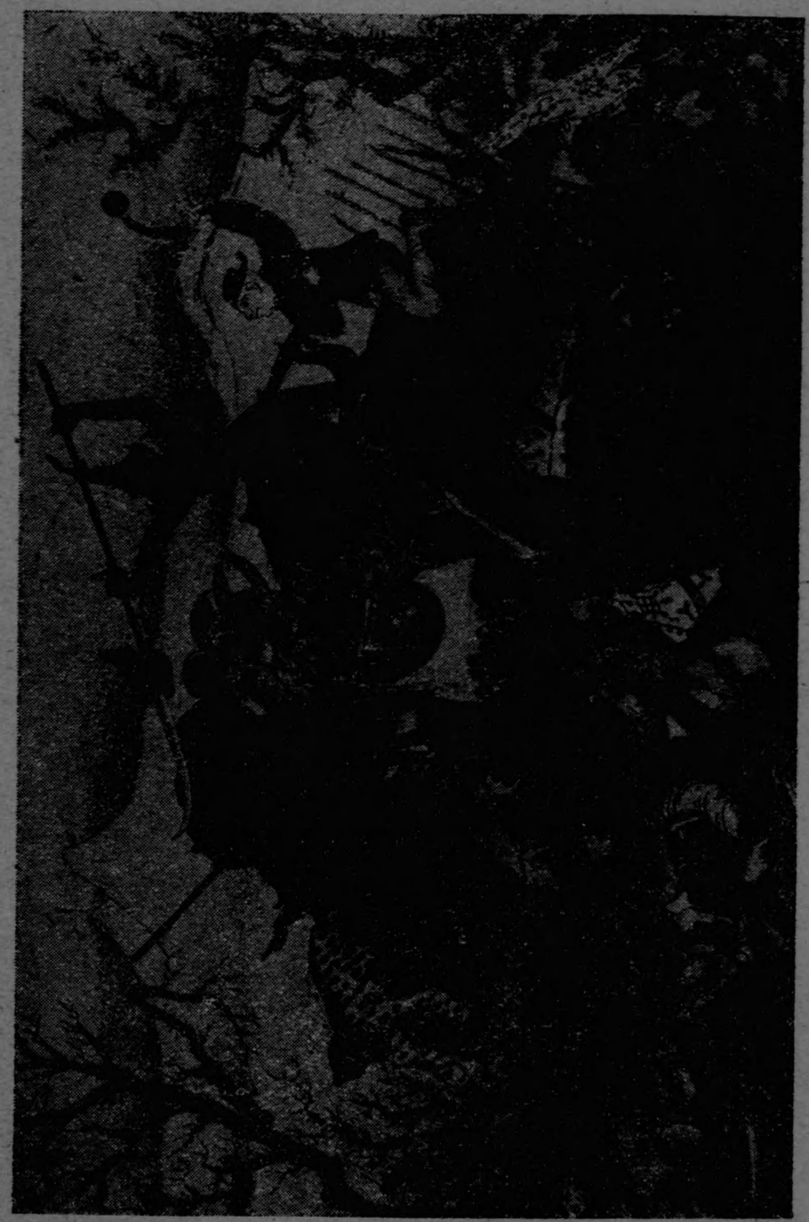
ボルボンの從者達は忽ち集まつた。神官の勝利の祈りを聞く爲武裝の兵士達も圍りに集まつた。

ベイボンサは戰闘準備を命じ、老王の許へ最後の別れを告げに趣いた。王は彼に祝辭を送り目出度く凱旋あれと祝つた。ボンサは凡ての王の飾りを身につけた。頭には立派な寶石を燦めた王冠を被り腰にはダイヤを燦めた黄金の柄の劍を吊し、指には美事な指環が輝いてゐた。象の小鈎の飾りは黄金の塊であつた。彼は身仕度を整え象に乘つた。特に戰の爲選ばれた兵士は護衛に任じた。二兄弟は將軍や首長に取卷かれて壇上にあつた。

敵の近かづくを知らされたので、ソウリボンは命令を下した。

「各部隊象兵は所定の位置に着き武器を取れ」

多くの集團は動いた。彼の命令が直ちに行はれたのを見て、ボルボンは兄に一禮し象に乘つた。黄



[illegible]

金の象の飾りの小鈎に腰の劔を垂れ、美事な大薙刀を手にし日除傘は彼の顏を陰にした。選ばれた從者は彼と共に戰ふ命令を受けて進んだ。全く武器の林が動くようであつた。凡ゆる銅鑼や喇叭が鳴り渡つた。兩方共互の敵に向つて突進した。彼我の軍隊が衝突するや、忽ち戰鬪が開始された。兵士の叫聲と武器の打合ふ音のみが轟き、大地は兵士の突擊に搖めいた。兵士達は入り亂れて戰ひ劔と槍で大白兵戰となつた。傷つく者、勝つ者、死んだ者が入亂れた。或者は倒れ、他の者は追討に飛びかゝつた。各々の兵士の體は血で眞赤になつた。群らがる兵士達の間隙に二人の王は象を乘出した。彼我の兵士は王目がけて突擊したが、血に彩られて倒れ、又起き上るのが見られた。二王が出會ふや否や王象は互に傷つけ合つた。二王は無言に武器をとつて渡り合つた。若々しい面には雄々しい勇氣と決心と落着きを現はしてゐた。練達勇敢なるベイボンサは最上の王として立派に、巧妙に、攻擊した。然し間もなく無敵のボルボンは體を伸ばして長き大薙刀を以つて、素早く敵の頭上に一擊を加へた、王の倒れたのを見てベイボンサ方の勇敢なる兵士達は退いた。吾勝ちに戰場から遁がれた。其處には恐怖に倒れ、疲勞に精も盡き果てゝ死んだものが見られた。ボルボンは敗ぶれて逃げる者を引留め安堵する樣告げ知らせた。兵士達は禮拜合掌して、ボルボンの供に加はり旗を下した。ボルボンは勇敢

なる相手の兵士を叮重に取扱ひ保護させて後、旗を高く上げさせて部下を隻め、兄の許へ挨拶に行き勝利を告げた。

（五）

二人は父に其子ベイボンサが戰死したのを知らしめた、そして使者に次の如く王に傳達せしめた。

「賢明なる王よ、貴方の勇敢なる息子は運命に見放されて勇しく戰死した。我々の偉大なる王は貴方が此上戰を續ける事の不適當ではないかと訊ねて居られます。若し飽く迄戰を續けるようなら岡の上に行つて待つて居て下さい。又若し望まれないならば我等が王の陣營迄拜禮に來られねばならぬでしよう。拜禮に來らるゝならば、乘物に乘らず徒歩でお出で下さい。武器も持たず、從者も連れず唯一人お出で下さい。此等の條件に應ぜぬ場合は、未だ敵對行爲あるものとして新らしく戰爭が起きるでしよう。起きれば貴方は命がなく貴方の生涯は終る事となりませう。」

此絶對的な言葉を聞いて、王は恐れて答へた。

「强き相手の使者達よ、どうして敗戰に身を乘出す事が出來やう。私の息子の戰死は運命で到方ない私は最早何事もなし得ない。私は命令の通り履行する爲めに贈物を纏める間、夕刻迄何卒お待ち願ひ度い。私は二王に此王國と財寶を渡しませう。其代り命だけは助けて貰ひ度い。」

使者達はソウリア王の回答を齎らした。軍隊は直ちに次の命令を受けた。

「旗差物其他各部隊の凡ての標識を地上に打立てよ、敗王が挨拶に來た時は、彼に我等の王の在場所を示すな、絶えず彼を欺むき、全く疲勞困憊する迄首長や將軍、大官の營所を識せる旗の所を引張り廻せよ。困憊の極倒れさうになつた時、我等の王の許へ導いて來い。又至る處で銅鑼や太鼓や喇叭を激しく鳴らせ。」

斯く命じ終えて二人は語り合つた。

「我々二人が長年味はつた苦しみの一端を、憩くの間味はせませう。我々が斯く生きてゐるのは全く奇蹟である。神の助け無くんば既に淋しい森の中に埋められて居た。彼を懲らしめねばならぬ、そして疲勞困憊して苦しみ倒れた時、我々は會ひませう。」

使者が使命を果たして歸つた後、ソウリヨ王は千々の思ひに身を切られる苦惱絶望の嘆きに涙に暮れた。彼は生命を恐れ唯一の跡取息子を死なせた事を悲しみ嘆いた。

「私の大切な息子よ、斯くも愛するお前を運命とは云へ奪はれて終つた。お前は私の心を慰め少し

も私を悲しませなかつた。私は王國を讓り人民は皆お前を謳歌した。噫!! 私は獨りぼつちになつて終つた。お前の傍でお前を援ける一族も持たず戰最中に死んでしまつた。私は最早お前の力を見る事が出來ない。私の人生は滅茶苦茶だ。」

恐ろしき報告を受けたネアンモンテアの苦惱は大きかつた。悲嘆の極心臓は劇しく波打つた。

「愛する子供よ、私の寶よ、斯程の悲しさ苦しさは又とあらうか。最早私を慰めてくれるものはない。如何して人々の幸福の主であつたお前は死んで終つたのか、何故私も一緒に殺して呉れなかつたのか、何故お腹の中で死なゝかつたのか、何故王様にならずに死なゝかつたのか。」

嘆き悲しむ裡に苦しさに堪え兼ねて氣絶して終つた。

◎

冷靜に返つたソウリヨ王は貴族達を集めた。そして全財寶を集める事を命じ、準備を整え彼は行列の先頭に立ち勝利者の營所に向つた。

同盟軍の各部隊では部隊の所在を示す旗差物が、林の如く立てられてゐた。凡ゆる旗差物が意氣揚々と風に飜がへつて居た。老王は最初に出會つた兵士達に王の所在を訊ねた。彼等は遙か彼方の赤い旗を指した。其處に到着した時、拜禮の準備をした。其營所から出て來た兵士は彼に告げた。

「王よ、貴方は我々の所へ拜禮に來なくてもよろしい、我々は人民の中から王の從者として選ばれた兵に過ぎません。」

其處で老王は尋ねた。

「勝利の軍隊の兵達よ、私は敗ぶれた王である。私は貴方の王に拜禮に來たのだ。何處に居らるゝか知らせて貰ひ度い。道を教へて頂き度い。」

「王よ、我々の王様は綠色の旗差物の近くに居られます。地平線の見へる彼處です。」

老王は其處迄行つた。そして拜禮の準備をした。其處には將軍達が宿營してゐた。彼等は王の拜禮の準備を止めて、他の一群を指した。老王は無數の軍隊の中をさ迷つた。そして疲れ果てた。

「私は如何なる恐ろしき立場にゐるのであらう。私を殺させる口實の爲めに集會の時を故意に遲れさすのでなければ、どうして斯様に嘘を吐くのだらう。私は歸順してゐるのに今更不親切な仕打ちである。然し私は命を助けて欲しい。どうして斯様に私を恥ぢしめ、苦しめるのであらう。日の暮れぬ内に二人の勝利者に會ふ事が出來ようか、二人は同情して私を助けて呉れるものと思ふが、恐

ろしい疑ひが私を苦しめる、胸は早鐘をつく樣だ。」

然し日は早くも暮れた。疲れと苦しみに俄かに力が弱つてくるのを感じ乍ら、彼は王の宿舍であると知らされた最後のものであらうと思ふ軍隊の營所に到つた。彼は平伏した。

首長は一禮した。

「王よ、どうして貴方は我々にかゝる尊敬を拂はるゝのですか、我々は王の閣僚です。」

彼が全く疲勞困憊してゐるのを見て二王の高臺の前に導いた。其處に勝利者を見てソウリヨ王は一層心配した。彼は敬々しく膝まづいた。

「王よ、何故貴方は斯く無慘な態度をとられるのですか、貴方は私が父の樣に老人であるのを分りませんか、」

「我々の側にお坐りなさい。」

斯く云はれて又一層恐ろしくなつた。王は敢て段を昇らうともせなかつた。地に坐つた儘合掌し禮拜した。二人の兄弟は立上り段を下り王の兩手を取つて云つた。

「いや〳〵我々は、父と同じ年齡の王より斯く尊敬禮拜せらるゝには堪えられない。斯くなさるゝ事は人の道や世の習慣に悖とる。」

斯く云はるゝ事も老人を安心させる事が出來なかつた。二人の王が彼の手を取り導くのを見て、彼は體を震はせ、之れは屹度殺されるのだと思つた。

「威德並び無き王よ、私に何の不安もお抱きにならぬ樣、私は何等の野心をも持つてゐるものではありません。惡企みを計つてゐるのでもありません。私は貴方達の惡口を云つた事も決してありません。私は歸順に參つたのです。其代りに何卒命を助けて頂き度いのです。私は貴方に王國と財寶と貴方を滿足さし得る全てをお渡し致します。」

ソウリボンとボルボンは答へた。

「王よ、我々は聊かも貴方の生命を頂かうとするものではありません。又我々は貴方を支配しようとするものではありません。我々はかゝる降伏を要求してゐるものではありません。貴方の息子は死ぬ迄對抗した。我々は貴方の口から尙戰を續けるお積りか、どうか知りたかつたのです。戰はれますか、それとも戰はれませんか、我々が知り度いのはそれだけです。」

話を聞いてソウリヨ王は恐怖で蒼白となり、今にも倒れさうになつた。二人が十年前死刑を命じた自

分の息子であるのを露知らずに、

彼は呟いた。

「此二人の王の心中はどうも了解出來ない。私は掌中にある。そして王國と財寶を提供した、而かも尙二人は戰はうとするのは如何なる理由であらう。恐らく言葉の上で恥をかゝせ、此上もなく私を侮辱し、無理矢理に戰を强要して私の命を望んでゐるのであらう。」

「私は再び貴方と爭ふ事は出來ません。王達よ何卒怒りを和らげて下さい。私を殺さずに下さい。私は永遠に恩を感じお仕へ申すでしよう。」

未だ親に知られぬ息子達は更に云つた。

「武力を恐れて戰はぬのですか、二人の息子を對手に出しなさい。彼等と鬪ひませう。然し何故貴方は一人なのです。二人の息子はどうして貴方に隨いて來なかつたのか。貴方はどうして二人を放任して置くのか、二人は今何處に居ますか、」

「それは王よ、私の二人の息子は既に數年前に死にました。次の子供は貴方に殺されました。二人の兄弟は性質が惡く私の愛に逆らひました。未だ子供であり乍ら、私の第二の妻に圖々しく暴力を

加へましたので二人の首を斬らせました。」

「二人は未だ子供であるならば、左樣な行爲はなし得ぬものと思はれるが、彼等の罪をどう思つたのか、第二夫人の訴へをどう思つたのか、二人の王子を憎んでゐた彼女が、故意に作爲したものとも考へられるではないか、今日貴方の敵である我々に、貴方を防ぎ得た二人の息子に對して實に貴方は不公平な處置を採つたのですね、貴方は憤怒に目が眩らみ、眞實に罪があるか、どうかも確めず子供達を殺させたのですね、それでは貴方の行爲は、怒れば凡ゆる判斷を誤まり、凡ゆる理性を失ひ、冷酷な同情心もない傲慢不遜な殘酷な人の行狀と同じだ。貴方は如何にして眞の心を現はす事が出來ますか、途方に迷ふ人民の前で、不面目にも敵手に身を委ね賤民の如く恐れ震へてゐる貴方は懺悔し、良心の苛責に苦しめられぬのですか、貴方は天罰を蒙むつて居るとお考へになりませんか、貴方の二人の息子に我々が似てゐるとは思ひませんか、吾々二人は貴方の二人の息子でありますぞ。」

此告白を聞いて老王は、更に恐れ震へ上がり呟いた。

「否、私の息子達ではない。貴方二人は私に難癖をつける口實を求めて居る。數年前に遺骸となつ

た息子だと勝手に云つてゐる。そして激しく私を詰じつてゐる。噫!! 私の最後が近づいた。」

次いで、老王は聲を少し高めて云つた。

「勝利の王よ、私は子供を斯く殺させたのは全く間違つてゐました。私は既に老耄して頭が鈍ぶつてゐます。妻に唆かされて成程と思ひ、一時の怒りで思慮分別もなく自分の子供に斯かる命令を下しました。何卒王よ、許して下さい。貴方達が私の殺させた二人の子供だと名乗つて、更に敗者の私を責めないで下さい。何卒寛大に願ひます。老人を此上苦しめないで何卒今迄通り生かして下さい。」

ソウリボンとボルボンは、明らかに父が自分等の事に就いて何も知つて居ないのが分つた。又父が老耄し、理性を失なつてゐるのを知つた二人は、其處で敬々しく父王の前に身を投げて云つた。

「おー、父よ、貴方が殺させた子供等はお信じにならぬが我等二人なのです。何卒我等が貴方の二人の息子兄弟である事を信じて下さい。何卒此上お疑ひにならない様、吾々はソウリボンとボルボンと呼ばれてゐます。ネアン・チェアの子供です。モンテア女王は我々二人を憎んでゐました。或日モンテアは我々を抱きつけて、返つて救ひを呼び私等を非難したのです。貴方はモンテアの云ふ事のみを聞いて怒りました。何も聞かずに貴方は、我々を殺す命令を下したのです。驚ろいた母は我々の後を森の中迄追ひ、私等を抱きかゝへ涙に咽んで倒れ、目の前で悶絶しました。私等は何卒甦き返る様神様に祈りましたが。神様は聽き入れて下さいました。神様の加護の奇蹟に死刑執行人は直ちに我々を遁がれさせて呉れたのです。」

斯くて二人は長い王國を去つてからの經過を、ボルボンの苦難、嵐、コントボレーへの到着、繪書の部屋の場面等詳さに物語つた。

最早疑ふ餘地もなく老王は子供達を抱きかゝへ喜びに溢れて云つた。

「吾子よ、神様に感謝しよう。神様の加護に依つてお前達は救はれた。私は生きた二人に會へるとは何と幸福な事であらう。強い心の優さしい元氣潑剌たる若さに溢ふれたお前達と。

私は誤まつてゐた。私は理性を失なつてゐた。私は餘りにもモンテアの愛に溺れて居た。モンテアの一言は法律の如く、私は眞因を確めようともせなかつた。反省もせずお前達を殺させようとした。然し神の恵みとお前達の徳性に依つて助けられ、そして二人共立派な王となつた。私は二人が軍隊の眞先きに立つて居ようとは少しも知らなかつた。此國に侵入した者が、お前達であるとは夢想だ

にせなかつた。私の罪は許さる可きものではない。而し最早老耄してゐる私である。どうか馬鹿者として生かせて置いて呉れ。」

二人は父の足許に平伏した。

「モンテアに依つて惹き起された事柄は、前世に定められた結果であり、運命であつたのです。」

老王は直ちに侍女達と共に母を子供の許に連れて來させる爲、チェアを迎えに使者を走らせた。

ネアン・モンテアへは徒歩で此處に來る樣にと命令が發せられた。間もなく來た。ソウリョ王は怒つて詰じつた。

「モンテア、お前は厚ましく來たものだ。狡猾な女よ、お前は私の手から子供達を奪つた。次の事をよく聽け、お前は巧言を以つて憎しみを隱くし、子供達を腕の中に引付けて、却つて大聲で助けを求めた。誰もお前の惡企みを疑はなかつた。今此處で委細を言つてやる。」

ネアン・モンテアは恐れ震のき涙を流して平伏した。

「大王よ、貴方の申さるゝ事は事實であります。」

告白を聞いて老王はモンテアを捉まへて命じた。

「直ちに池に投げ込め。」

◎

不運なネアン・チェアは叮重に兵士達に守られて入つて來た。そして眼前に息子達を見て、嬉しさに感極まり涙乍らに二人を抱いた。

「二人よ、十年經つてお前達が歸つて來ないので、私は望みを絶つてゐました。貴方と離れてから一日として幸福な日はありませんでした。貴方の父の怒りは貴方達にしたと同樣、私にも用捨はありませんでした。ネアン・モンテアは一層父をたきつけた。噫!! 今日此處で貴方達と會はうとは貴方が歸つて來なければ、私は落膽の餘り死んだでしよう。私の遺骸は慘じめな小屋に捨てられてゐたでしよう。」

ソウリョ王はチェアに云つた。

「妻よ、情をかけて呉れ。私の行爲を何卒許してお呉れ。如何にも私の罪は大きい。私は辱しい、面目もない、事件を惹き起したモンテアも、ペイボンサも死んで終つた。天罰である。反對にお前には運が向いて來た。お前は幸福だ。子供達に再會出來た。二人は王になつてゐる。私の行爲を何

卒許してお呉れ、愛する妻よ。」

「王よ、私は露怨みも復讐の心も持つては居りません。去つた子供は此處に歸つて來て居ります。凡ては水に流れました。昔通り幸福に還りませう。」

二人の若き王は、後ろに敬々しく跪づいてゐる妻と子供を紹介した。ソウリョとチェアは美くしい若い妻と子供を見て心強く幸福を感じた。そしてボルボンの子供を膝に抱き上げて愛撫した。

◎

ソウリボンとボルボンは、次いで兄弟であるベイボンサの葬儀の準備をした。立派な記念碑を建て若き王の遺骸を叮重に收めた。晝夜一ヶ月半の間、僧侶は墓の側で讀經した。次いで火葬の儀式が行はれた。無數の爆竹が空に打上げられ、花火は夜の空を晝の如く明るくした。誠に盛大な祭りであつた。瓔絡の花は葬儀の建物を飾り、附近一圓の廣い庭には木を植えられ、細工の花や果物が吊るされた。風に吹かれた花は爽やかに、果物は自然に熟してゐる如く巧みに作られた。

ソウリョと若き王達と息子は、彼等の手で火葬臺の上にベイボンサの棺を置いた。そして死者に彼等の罪の許しを祈つた。種々の財寶が貧しき者へ施された。敬虔な儀式勤行は終り、王の子供達の即位式は莊重に擧行せられた。

滯りなく萬事終了したので、二人は王國に歸還する爲兩親に別れを告げた。

「父よ、貴方の御代の安泰でありますやう。我々の國には王がありません。歸還の道は遠く且つ困難です。之以上長く留まる事は出來ません。」

強ひて止める譯にも行かず王は云つた。

「子供達よ、長くお前達が居て來れゝば結構な事だが、私は強ひて主張する事は出來ない。お前達は私の唯一の後繼者である。若し出發するのなら、私に孫だけでも殘して置いて欲しい。私は孫を王位に即けさせよう。」

「貴方がそれを望まるゝならば、其通りに致しませう」とボルボンは答へた。

「御話申上げた死刑執行人を連れて來て戴き度い。執行人達は我々の生命を助けて呉れました。彼等の恩は忘れる事は出來ない。」

「子供達よ、結構な事である。恩を忘れぬと云ふ事は誠に喜ばしい。貴方達が王國に歸られたら私等の事を思出して頂き度い。老後一番頼りにする貴方達だ。私の過去の禍を忘れて呉れ、そして時

々は會へる喜びを齎らしてお呉れ。」

次いでネアン・チエアは、

「可愛い子供達よ、私は別れ度くない、折角會へたのに又別れねばならぬと思ふと悲しい極みです。丁度、海岸で子供を沐浴させてゐる一婦人が、波に攫はれて子供を手から離したのに似てゐます。女は泣き叫び砂に轉々し、神に呼び掛け祈つてゐる。神が祈りを聽こし召されて、天使が子供を救ふ女の手許へ還へした。私は丁度此母の樣です。どうして貴方達は私の手許から離れて行くのでしょう。」

二人の子供は母の足許に身を伏して、

「母上、どうして貴方を苦しめて置く事が出來ませう。貴方が會ひ度くば、我々はいつでも會ひに參ります。」

ボルボンは、死刑執行人の頭目の行爲を賞する爲、彼を副王とし再びシヤボレーに向つた。

數年の後トルニツト王は崩御し、最上の儀式が營まれた。

此大家族の上に幸運が續き、王國は夫々繁榮した。人民は王道樂土を謳歌した。王や女王は皆長生きした。死後は揃つて神の國に昇天した。（終）

昭和十七年二月十四日印刷
昭和十七年二月十八日發行　（非賣品）

編輯兼發行人　大阪府豐能郡南豐島村穩積字市場一二八三番地　高垣謹之助

印刷人　神戸市神戸區江戸町一〇二番地　田中印刷出版株式會社　代表者　田中守一

911
294